

前の山陽ホテルが僅かに近代文化を代表して驛頭を飾つてゐるのが眼立つ。

一行中の遠藤氏の義弟に當られる方が驛迄で出迎へられ何呉れと市内見物の御便宜を計られたことは不案内の一行にとつて全く渡りに舟であつた。下關目抜き通りと聞いたが、辛じて自動車のすれ違へる程度の街路を挟んで海産物問屋、普通商店等が雑然と櫛比し、其の處々に銀行、新聞社等が介在して街の繁華を物語つてゐる。海岸通りの小高い丘の麓で車が停められた。石疊みの急坂を登り切ると道は右折して丘上の臺地へ出る。日清戦争の際李鴻章と伊藤博文、陸奥宗光等が講和談判の爲め會見したと云ふ春帆樓の建物を左に見て進むこと數十歩、安徳天皇阿彌陀寺陵の前を過れば御裳川の碑が先づ一行の足を留めた。

赤間宮は殆ど御陵と境内續きで、左手老木の鬱蒼たる茂みに圍まれた崖端に苔の蒸すに任せ路傍の捨石の様に立ち並んだ十餘の小さな墓標、これが平家一門の終焉を語る墓所と聞くだに哀れの限りである。薄暗い木立一ぱいに蟬しぐれのみが徒に喧しい。

此處を下ればすぐ前の浦つゞき一帯が壇の浦である。御裳川の遺跡も形ばかりの名残りを留め、安徳帝御入水の場所もそこぞと思はるゝあたりの水も、今は大小船舶のあはたゞしい往來に静寂にかへ

る暇もない。

車は元來た路を引返して龜山宮へと急ぐ。神前廊門の上に掲げられた「鎮西第一勝」の文字が語る如く眼下に擴げられた海峽の風景は一眸の中に收まり、一衣帯水、文字通り指呼の間、僅か數町を隔つる九州の山々が懐しげに吾々をさし招ぐ。山を下り門司行唐戸渡船場に向ふ。途中街の兩側の喧騒に先づ度膽を抜かれる。北側はおびたゞしい野菜、青果の山。南側は魚、魚、魚のオンパレード。西瓜、バナナの價安きこと土の如しとは此の事か。足許に生きた鰻、蝦、鯛が跳る。雲集した男女の群の怒號。山積した野菜と魚類の發散する異臭。就中その中を右往左往する朝鮮人の何んと數多いことよ。こゝが有名な日本一を誇る唐戸市場と聞かされ其の偉觀に三嘆しつゝ關門連絡船に乗る。

九州……と云つても此處からはすぐ對岸の門司がもうそれであるが……と本州とを絡ぐ重要な足、それが此のモダン渡し船である。此處は有名な急潮流と聞く。その潮流の中を、群る大小船舶の間を縫ふて進む船足は速い。龜山宮本殿の薨が次第に視界を去り反對に九州の山々が刻々と眉にせまつて来る。ほのかな九州の臭ひ！一同軽い興奮を覺えて上陸を待つた。

四、工業日本の心臓に行く

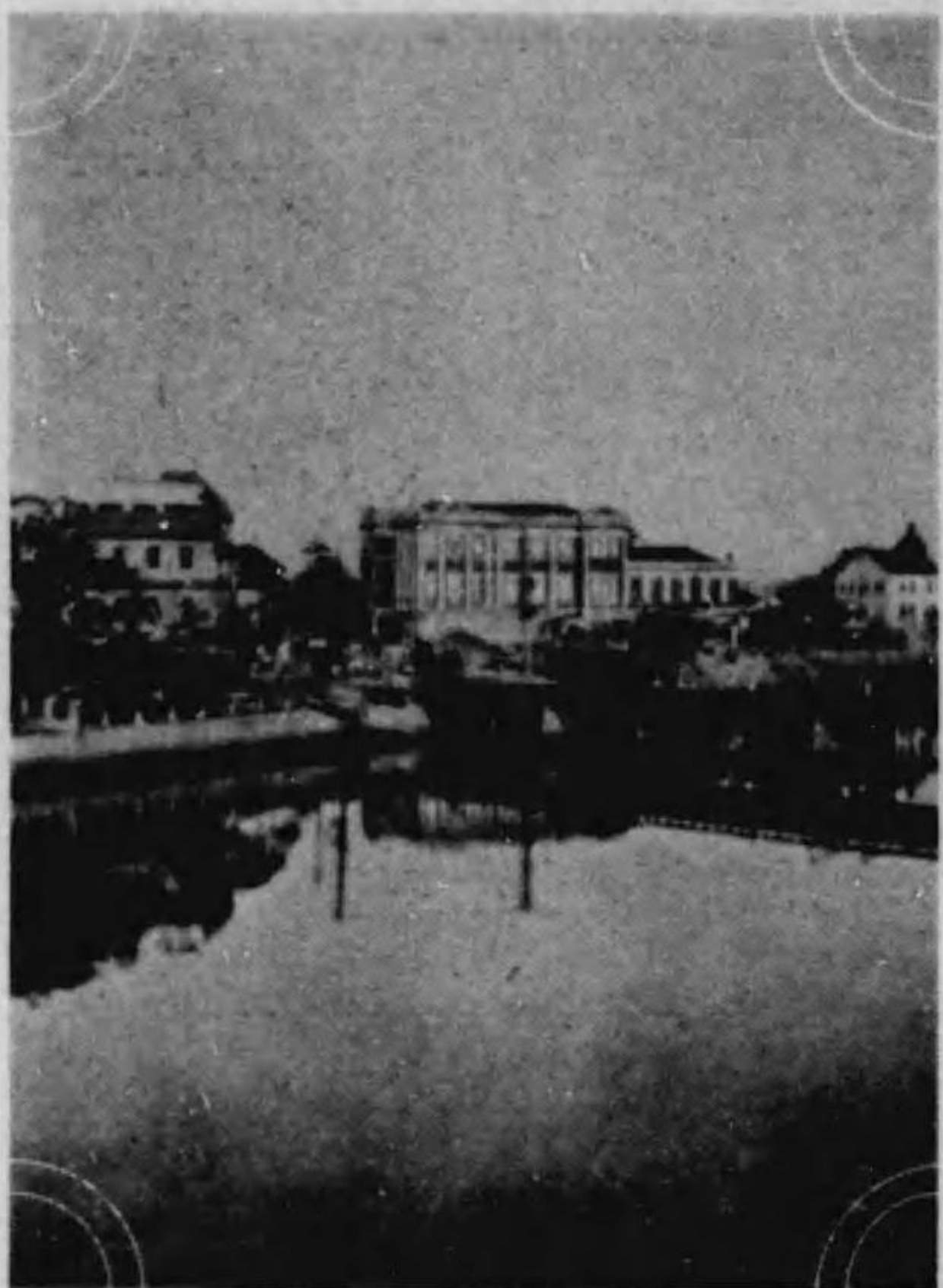
午前九時五十分門司發長崎行急行で博多に向ふ。

氣持のせいか九州に足を踏み入れてから急に暑氣が増した様な感じがする。しばらくは小都會を點綴する海岸線に沼ふて走る。山水の變化に富んだ山陽線をつひ先まで見て來た眼には稍々單調さを感じる景色ではあるが、小倉を過ぎる頃漸く窓外に展開する特異な工場街風景に好奇の眼を見張る。

小倉織の名は我々の耳に親しく、古風な織物の産地を想像させるが、今眼前に見る現實の小倉市の何と潑刺たる工業躍進振りであらう。陶器、電球、洋紙等の大工場が日曜日だと又ふのに其の巨大な煙突から吐き出す煤煙で汽車の行手にぼんやり煙幕を張つてゐる。戸畑、枝光と進むにつれて益々工業の規模は本格的となり、それが八幡を過ぎる迄續く。車窓の右手に連續するのは殆んど八幡製鐵所と其の附屬工場である。左側丘陵性の臺地には此等工業街を見下す文化式洋風住宅が點在し、其の臺地と工場街とに挟まれた低地一帯は煤煙にまみれた勞働階級の住宅街の連續である。有らゆるものが皆躍動しつゝある如く眼に映ずる。五色の煙を吹く大煙突群。紅蓮の焰を吐く熔鑛爐。この白日なき工業街の中心都會八幡市は總人口十四萬を擁する完全な勞働市である。その二割は八幡製鐵所従業員と云はれる。規模の雄大さが覗はれやう。こゝ二三年來非常時産業日本の全神經は軍需關係重工業に集中されてゐる

る際とて、其の活動の眼さまさか偲ばれる。

門司を發つて工業日本の心臓部を縦走すること一時間半、名高い千代の松原を通り抜けると今日の



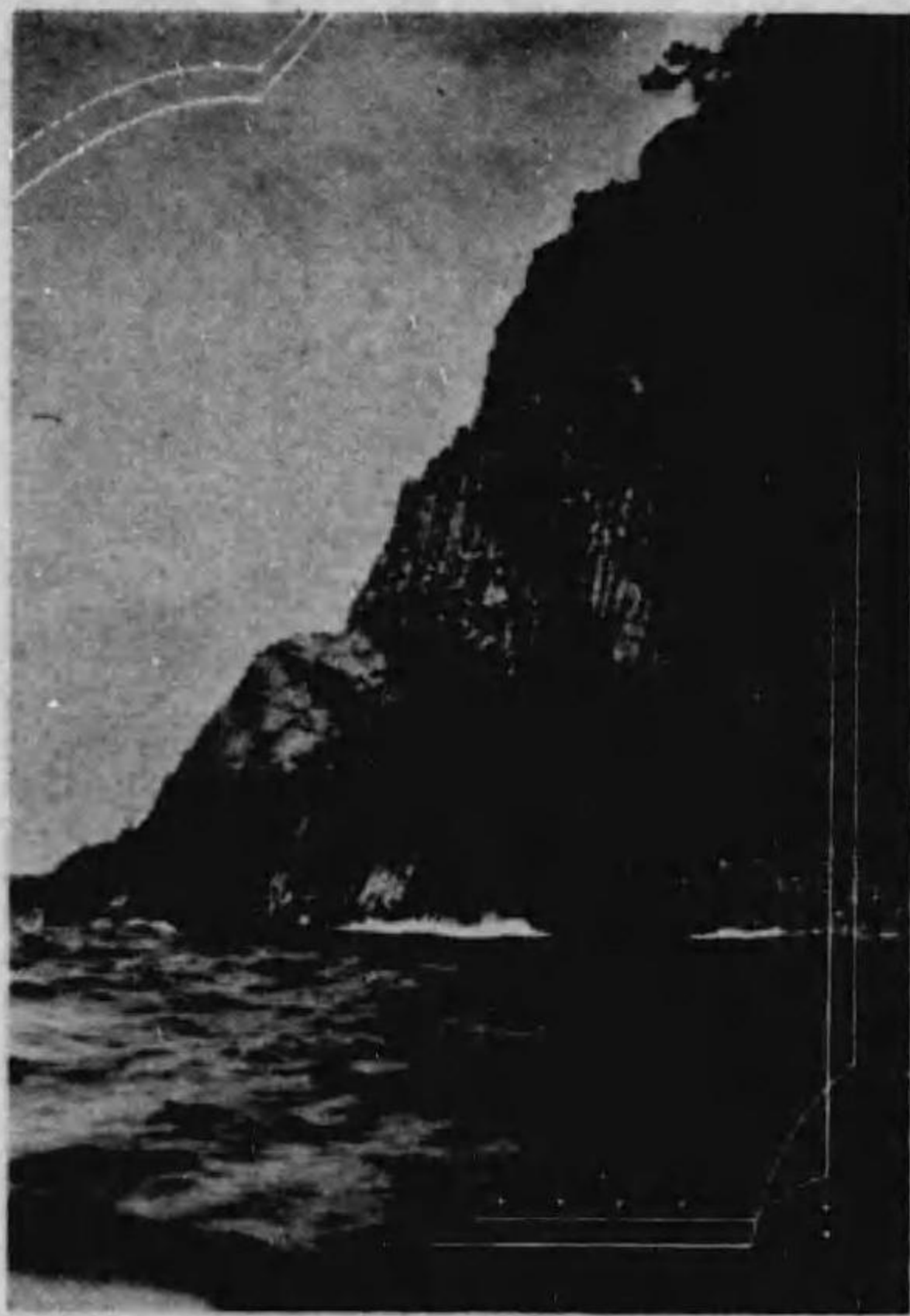
西中洲方面の遠望

行程の終點博多である。驛まで出迎へた番頭の案内で直ちに東中洲の旅館に向ふ。東京を發つて以來始めて見る完備した近代都市、殷賑九州第一を誇る福岡市の面目は躍如として整備したその街衢に覗はれる。更に市中を海岸に向つて縦貫する幾條かの清流が、兎もすれば人爲的工作に偏しやうとする市街の景觀に一抹の和やかさと情緒と

を漂はせてゐる。然も清冽なその河水の中を上下する魚の群れまで旅館の二階から數へられる位である。

旅館で一同お揃ひの浴衣に着換へ休息の暇もなく自動車で芥屋の大門見物に出掛ける。舊福岡の市

街を出はすれてから約四、五十分、坦々たる自動車道は殆ど博多灣の紺碧に沿ふて残島、生の松原等の景勝を望みつゝ疾驅する。對岸一帯に突出した西戸崎の尖端、遙か模糊たる音無の瀬あたりに玄界島の丸みを帯びた線が浮んでゐる。前原から路を右にとつて大門崎の尖端に向ふ。



芥屋の大門

芥屋の名は關東の人々の耳に餘り親しまれた名ではないが、一度訪れた者の三嘆措く能はざる奇勝である。辛うじて十人を乗せる程度の小舟に船頭が一人、今日は靜かだと云ふその玄海の波の荒いこと。舟は木の葉の如く濤に奔弄される。口では互ひに強いことを云つてゐるが一同生色がない。芥屋の大門の入口に舟はとめられた。波は岩にさへぎられて比較的靜かに此の大觀を觀賞することが出来る。素晴らしい玄武岩の構成美である一尺角の六角材を數千本數萬本一束にして玄海灘の怒濤の中に浮ばせたのが此の大門である。然も其

の中央部に穿たれた大空洞は深さ三百米まで小舟を入れるに足り、尙其の先は幾許あるものか極めたものもないと云はれる。洞頂、洞底ことごとく六角石の龜甲紋を以て織りなされ美觀言語に絶するとはこの事であらう。しばし洞中に舟を留めて遙か洞外に咆哮する玄海の波濤に耳を傾ければ一種凄愴な大自然の壓迫を犇々と五體に感じて來る。

この廻遊三十分許り。舟着場前のさゝやかな店で遅い中食をとる。店に似合はぬ新鮮な魚介の料理に、舟の酔ひも醒めた一同急に食慾を回復し給仕の女中を纏手古舞ひさせる。

昨日東京を發つて以來一晝夜に餘る長旅をして來たとは思はれぬ元氣さで一同記念撮影の後直ちに博多に引返す。途中元寇の防壘を訪れて當時の國難を追想し、平野國臣の碑、西公園、大堀公園等を見る。市内目抜き通りの福岡株



福岡市天神町附近 (正面がくが御殿)

式取引所のある所が有名な「くろがね御殿」の跡と聞き苦笑を禁じ得なかつた。

かくて旅館に寛いだ一行が名物の「水たき」に舌鼓を打ち乍ら夕食の終る頃ともなれば、灯の入つた河畔の街々の空には星影漸く淡く、涼を趁ふて那珂の橋上に佇めば行交ふ麗人の影もちらほら、

筑前博多の帯をしめ

……歩む姿が……

博多節の音調こそきこゑないが、只だ行きずりの吾々の眼にもほのかな博多情緒が感じられるのであつた。

五、博多より長崎へ

八月十三日(月) 快晴。風なく頗る暑し。

九州第二日の旅は先づ東公園見物から始められる。千姿萬態の老松の梢を渡る潮風に晒されて力強く立つ巨像二基。一は龜山上皇の尊像。一は僧日蓮の勇姿を永久に記念する「立正安國」の立像である。何を念するか朝まだきを其の像下に膝まづき老女が一人御提目を唱へてゐるのを見て敬虔な氣持になる。續いて筥崎宮、香椎宮の順序で参拜を済ませ、再び福岡に引返す。福岡市の銀座、尾張町交

又點と云ふ所であらう、天神町の九州鐵道福岡驛から二日市行急行電車で太宰府へ向ふ。

飛梅や筑紫の春の初たより

和やかな南國の花時、筑紫の春を思ふべく餘りに猛烈な暑さではある。



太宰府大反橋を渡る一行

唐門造りの幾つかの大鳥居をくゞり心字の池に渡された大反橋を珍らし相に渡ると太宰府神社々殿の華やかな朱の色彩が先づ一行の眼を射る。菅公遺愛の老梅と傳へられる飛梅のほとりで一同記念撮影の後、二日市に向ふ。僅かな待合時間を利用して銀行へ第二信を書く。

午前十一時八分二日市發、途中鳥栖で長

崎行急行に乗換一路長崎へ直行する。佐賀縣を横斷して早岐を過れば汽車は殆ど繪の如き大村灣の岸に沿ふて走る。車窓から手を延せば海水が掬ひとれ相である。

對岸西彼杵一帯の山々が投ずる紫の山影、遠く低くたなびく白雲が波一つない海面に映じて視界の及ぶ限りどの一部分をとつても立派な風景畫である。

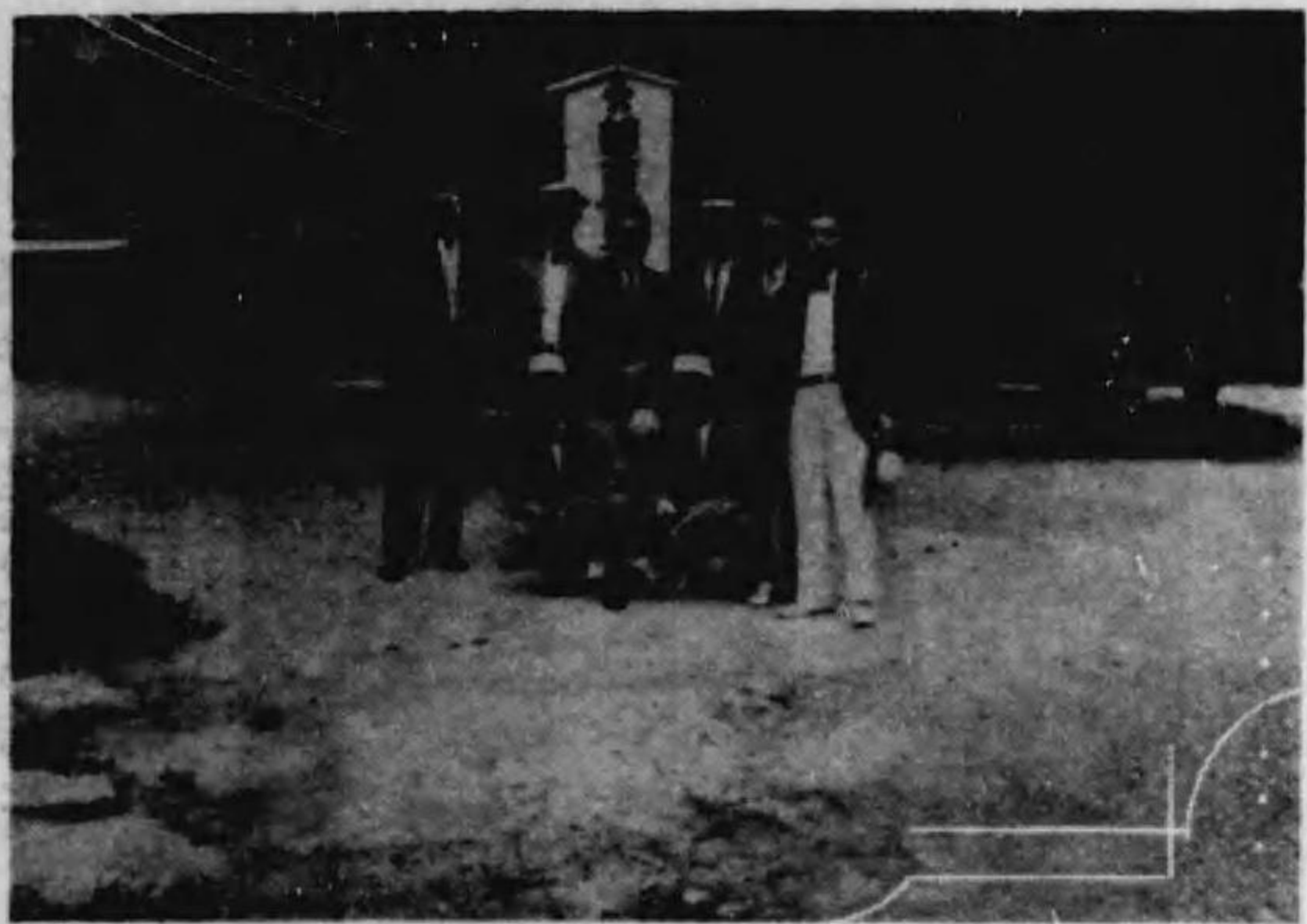
山畑のざぼんの緑あたゝかに

汽車南國の都に入るなり

午後三時十七分長崎驛につく。長崎と聞いたゞけで何がなし日本のはてに來て了つた様な氣持になる。

六、長崎の懐古趣味

旅館に少憩後一同浴衣がけで市内見物の自動車を走らせる。三方に繞らした丘陵性の山地と残された一方に湛えられた圓き入江。そして溫暖な氣候に加ふるに淳朴な人情。感覺的に鋭敏な外國人がどうしてこれを見逃さう。長崎が對外的に早く開けた所以もこゝにあらうし、外人間に「世界の樂土」とまで激賞されたのも決して偶然ではない譯だ。



太宰府神社にて記念撮影

鎖國三百年間西歐の文化は僅かにこの長崎を通じて幼き日本に注入された。醫術も、科學も、宗教も。長崎は封建全日本の眼であり耳であつた。されば現在より過去により多くの價値を持つ開港場である。貿易の第一線に立つて長崎が長崎の働きをしたのは過去のこと、今は使命を果したものゝ安易さで、安らかな追憶の夢を繰返してゐる——それが現在の長崎ではなからうか。

街は平和で、淳朴で、古風で、歩道の石畳の一枚／＼にも歴史の香ひが吹込まれてゐるやうな氣がする。諏訪神社から支那寺崇福寺へ、それから大浦の天主堂へ、一巡するにつれ、その感が益々深くなる許りである。宗教的雰圍氣の濃厚なことが又はつきり行人の心を捉へる。薄暮の天主堂の祭壇にひれ伏して敬虔な祈りを捧ぐる若い人々の姿が宿に歸つてもしばらくは心を離れやうとはしなかつた。

七、雲仙を越えて

八月十四日(火) 快晴。暑さ少しも衰へず。

纏綿として盡きぬ回想的興味に心惹かれつゝも、急ぐ旅の常として今朝はもう長崎を去らねばならない。

午前九時一行は二臺の自動車に分乗して長崎の街を後にした。雲仙へ登るのである。

旅に出て、はや四日目。目まぐるしい環境の變化と、次々に來る好奇心の満足感に酔ふて、すっかり東京を忘れ、自分を忘れて來たこの四日間ではあるが、案じて居た班員の健康は申分なく、班員相互の氣持は行内に於ては且て見られなかつた完全な融合によつて結ばれ、豫め立てられたプランが著々と進められてゆくのは愉快である。

連日の干魃に、濛々たる砂塵は車の前後を包んで、しばらくは四邊の景色さへさだかではない。行くこと時余やがて矢上の一小部落を過ぎ山端を迂廻するや視界は突如開けて、眼下に橋灣の女性的な風光が展開する。岸を洗ふあるかなきかの小波が、千々石の松並木に沿ふて白線を起伏させてゐる。小濱あたりの湯の煙であらう、對岸雲仙の麓に白いものが斷續する。この平和境が橋中佐の如き強毅な英雄の出生地と聞いて一寸不調和な氣持になる。「橋中佐出生地」とか「橋神社建設豫定地」とか云ふ大きな白標が處々に一行の眼を惹いた。

道は愛野村を過ぎてから急に勾配を増して來る。今來た許りの道がもうすぐ眼下に白く光つてゐる。樹間に隠見する谿谷の深さが、もう我々が相當の高さまで來てゐることを物語つてゐる。「雲仙國立公園」の棒杭のあるあたりから更に道は峻しくなつて來た。惜しいことに樹木の繁茂が視界を遮ぎつて

展望が思ふやうでない。涼しさも期待した程でなく何んとなく失望に似たものを感じる。やがて硫黄泉特有のガスの臭氣が濃くなつて自動車は九州ホテル玄關に横付けされた。

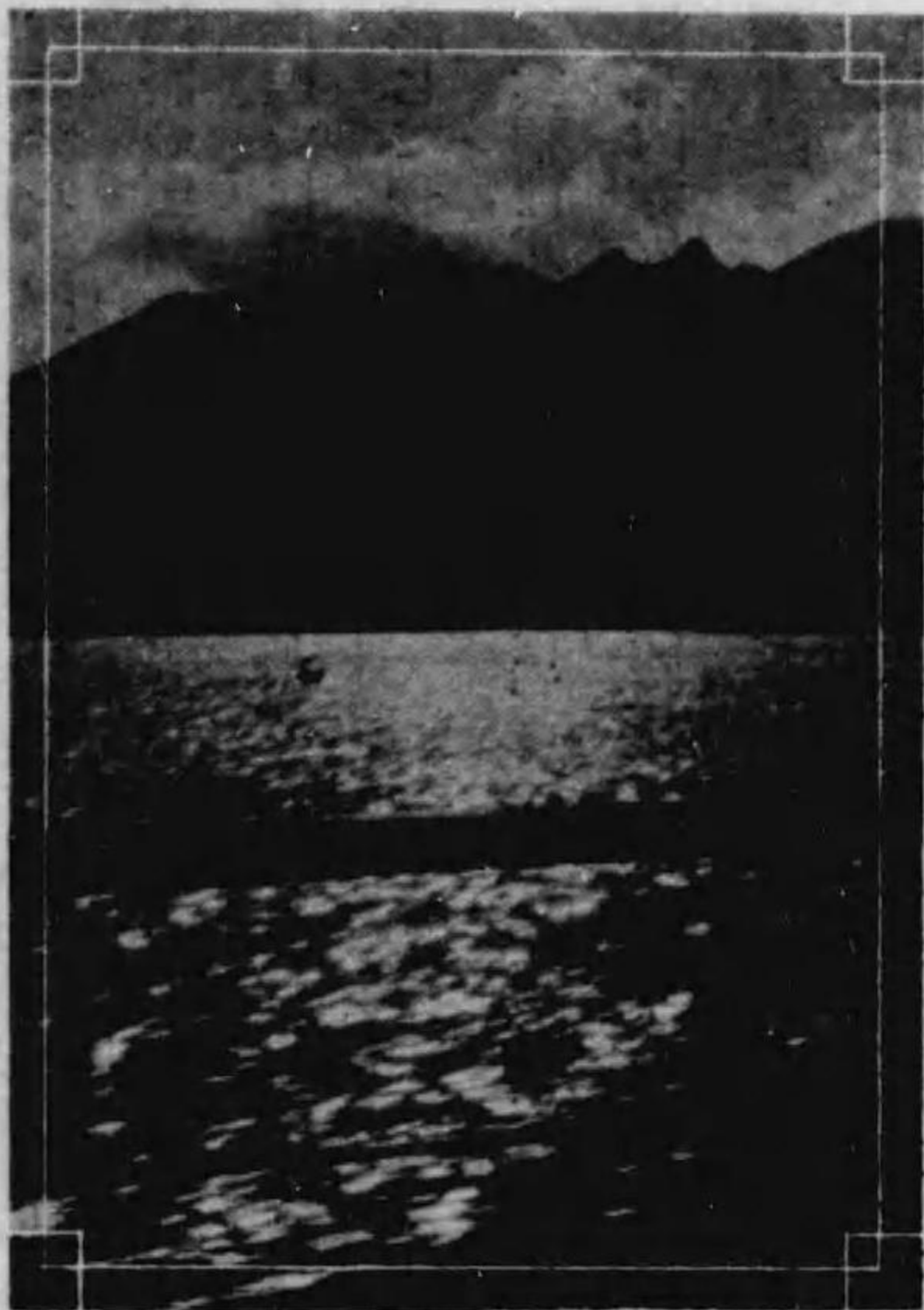
ホテル玄關前に展開された國際的情景、それは宛然人種展覽會の觀がある。痾高い英語の會話。獨逸語の窮屈な耳ざわり。フランス語らしいアクセントに支那語の會話が絡んで聞える。氣のせいとか、此處では日本語さへ遠慮してしやべられてゐるやうだ。卑屈かも知れないが軽い屈辱のやうなものを感じて一寸憂鬱になる。

雲仙は箱根を見た眼には、とりわけ新しい感興を惹く何ものもない。規模に於て遙かに箱根に劣り溫泉的雰圍氣に於て到底箱根に比すべくもない。只山頂に至れば北に有明、西に橋、東南に島原の海灣を繞らした水陸の眺めを恣にする點僅かに箱根に誇るものがある許りである。

純洋式の晝食後再び自動車で島原に下る。途々横手の森林から幾度か裸馬が跳び出して車道を裕然と横切るのに出會ふ。此の邊一帶に放牧されてゐる若駒である。

午後四時四十分島原湊を長水丸と云ふ五百噸餘りの汽船で三角へ向ひ發航する。折から夕陽は雲仙の山の端近く傾いて、九十九島の名勝を浮べた有明海面に金色の波紋を畫き出してゐる。油を流した

様な水面を去來する漁船の白帆が松島のそれを思はせる形の整つた大小の島々の間に隠見する。やがて行手におびたゞしい木材の山が見え出して船は三角港の棧橋に横付けされた。危いと思つた夕立雲が此頃たう／＼大粒の雨を降らせて来て、果ては沛然たる雨足が有明の海面をすつかり曇らせて了つ



(仙雲が面正) 海明有の照夕

た。夕立のせいでもあるまいが香氣な九州の汽車は定刻を二十分も遅れて裕々熊本に向け出發する。
宇土驛あたりから雨は止んだらしく、窓外は全く夜のとばりに閉ざされて、折柄舊盃蘭盆の御精靈を迎へる灯であらう、村人の提灯が遠く近く畦道に明滅するのが見える九州第三夜の宿が我々を待つであらう熊

本市の街明りが北の空にほのかに見え出した。

八、森の都熊本

八月十五日(水) 快晴、氣温頗る高く蒸し暑し。

午前七時早くも朝食を済ませ市内スピード遊覽の計畫で先づ熊本城に向ふ。

外來文化を直接的無批判的に移入模倣することに依つて雜然たる都市の型態を完成させた長崎市、その直後に訪れたこれは又純日本の色彩の濃厚な熊本市。その兩者はよきコントラストである。加藤氏七十二萬石の豪華の跡を物語る熊本城を中心に市街の各所を彩る數多い濃緑の樹木がゆかしい落付



熊 本 城 宇 土 櫓

きを見せて森の都の名がしつくりとうなづかれる。熊本城本丸の午砲臺上から俯瞰した熊本市が聯想させるものは東北の森の都仙臺の偲である。共に歴史的発展の過程に面白い程近似性を持つ許りでなく、現在に於ても政治、文教の府としての存在理由を有する點に顯著な共通點を見出す。然も熊本が世界的大觀を以て誇りとする大阿蘇遊

覽の門戸を爲す様に、仙臺も亦日本の靜的美を代表する三景の一松島の景勝を附近に擁してゐるなど興味深き對照と云ひ得はしまいか。

熊本城を辭去した一同は次で日蓮宗九州總本山本妙寺へ詣でる。百數十級の石段が遠慮會釋もなく一同の汗をしばる。淨地廟に希代の英傑清正公の靈を弔ひ休む暇もなく運轉手にせき立てられて車中の人となる。車は市の郊外を半周して水前寺公園に着く。水前寺は寛永九年細川公が肥後入國の際伴て來た僧玄宅が建立した一寺の名であつて、後この寺院境内に藩公遊憩の園庭を營み之を成趣園と稱した。これが現在の公園である。日本造園藝術の粹を集めたと云ふのであらう、富士に型どつた大芝山を中心として東海道五十三次の景をとり入れた結構の美は用意周到な一木一石の配置にも覗はれてその清澄な泉水の流れが炎熱の中にすがすがしい涼味を漂はせてゐる。

水前寺公園を出て路を右折、往年産業博覽會場に當られたと云ふ廣大な草原を通り抜けると水前寺驛である。

午前九時二十六分水前寺驛より熊本市に別れを告げる。行手遙かに見えた阿蘇の頂きが刻々と車窓に近づいて、汽車はもう外輪山の中を走つてゐる。勾配が急なため汽車は前後にジグザグに進む。喘

ぐやうた汽鐘の咆哮が山腹にこだまして遅々たるその歩みもどかしい。やがて外輪山を駆け抜けるや廣大な舊大火山口原を滑るやうにして汽車は阿蘇登山口たる坊中驛につく。

九、大阿蘇登山行

坊中驛に降り立てば海拔一千七百餘尺の山氣がもう、ひんやりと襟元に感じられる。荷物を驛前の茶店に託し若い女車掌の愛嬌に迎へられて直ちに名物登山バスの客となる。

これから山上まで三里二十七町、行々車掌嬢の美聲が奏でる一種獨特のユーモラスな説明に聞き惚れながら愈快な登山が始まる。

聖武帝勅願所と銘打たせた西巖殿寺前を過ぎるや、森林地帯を縫ふ急坂が約一哩も続く。阿蘇一帯の豊富な資源をなすと云ふ杉、檜等の密林を抜けると突如眼界は展



大阿蘇外輪山の遠望

けて、廣潤な草原地帯に出る。三方の空を劃する長城の如き外輪山のうねりが大パノラマの背景畫のやうに、ぐるりと舊火口原を圍繞し、今登りつゝある現火口丘群の麓につゞく一帯の平野のそここゝには玩具のやうな部落部落の建物が散在してゐる様まで一眸の内に收め得る大觀望である。周廻三十里、直徑七里を算すると云ふ此の大火山原には現在十四ヶ町村と五萬を超ゆる人口を擁してゐると聞くだに往時、今日の九州を形成するに至つたと云ふ大噴火の規模の雄大さが偲ばれる。大火山模型の如く整備した山岳の配置。遙か眼下に擴がる火口原の綠野。それ等大景觀の中軸をなす阿蘇五岳の變化極まりなきただすまい——それ等が車の進むにつれて刻々に車窓に現出する大自然の飽かぬ眺めは能く筆舌の盡す處ではない。

その頂きより、大阿蘇五岳の全貌と阿蘇谷一帯を恰も佛の大涅槃像の形になぞらへ見ることが出来ると云ふ大觀峰や、奇しき傳説の數々を持つ贅塚や米塚の景勝が息をつぐ暇なく車窓に展開する。やがて杵島岳の山腹を半周するや道は殆んど平坦となり満目の草原には放牧された無數の牛馬の群が、無邪氣な瞳で登山自動車を見送つてゐる。或ひは車道に出て自動車に負けまいとして競走するものもある。此の平和な天然の牧場は其の昔烏帽子岳爆裂の際に於ける火口の跡と聞けば慄然たるものがある。



大 噴 火 口

る。

山のAワン グレート阿蘇はヨ

草の千里に 火の柱

バスのサイレン おぢるな黒馬よ

行けば龍膽の花が散る。

その草千里に續く山上の平原は、往時西巖殿寺を始め三十六坊、五十二庵を擁する一大修験の道場であつたと云ふ古坊中で、今は跡形もない草野原に低く白雲が飛ぶ。

午前十一時山上の茶屋に着く。携帯の辨當で腹をこしらへ、案内人を先頭に愈々火口巡りに出發する。病後の體を心配された班長も殊の外の元氣さで途々案内人の誇張した説明を聞かされ乍ら十町餘りのだら／＼坂を登る。草一本ない火山岩の道端には去年の爆發で流出したと云ふ熔岩が無氣味な赤黒い肌を見せてゐる。「火口近し」の棒杭をすぎ最後の岩かどを登り切ると

火口壁上に出る。

眼前に繰展げられた巨大な悪魔の口にも似た大噴火口は、南北に長い瓢箪形をなし、急峻なその内壁は縦横に無数の層を露出し、恐ろしく俯瞰すれば百數十米の底部には黄色の硫黄泥が不気味な沈黙を守つてゐる。最も活動的であると云ふ北端の第一火口も、火口底の處々から僅かに白い蒸氣を噴出してゐるのみである。此の大火口よりの噴煙とそれに伴ふ凄絶な鳴動とに接することを得なかつたのは残念だけでも煙に遮ぎられることなく仔細に火口の内部を観察出来たことを、せめてもの幸としなければならぬ。

遊覽一時間、全く大阿蘇の發散する偉大な靈氣と、大自然の威力に完全に打ちのめされた様な氣持になつて山を下る。車は再び元の道を坊中に引返す。天界より又俗界に舞ひ戻る氣持である。一同は始めて吾に返つて背後に遠ざかりゆく五岳の靈峰を仰ぎ見、生れて始めて接する自然の大偉觀に對する印象をはつきりと腦裏に反芻した。

午後一時五十分坊中發、再び東外輪山を越えて別府に向ふ。單調な豊後の山々を行く汽車の歩みは遅い。前途には我々の連日の疲れをたち處に解消させて呉れるであらう別府の町が待つてゐることを

思へば、一同この四時間が一日より長く思はれるのであつた。

午後五時四十分別府着。出迎ひの番頭に案内されて海岸の旅館に落つく。斯くて四日に互る眼まぐるしい北九州の旅の結尾も近づいて、これが九州最後の夜となる事を思ふと張切つた氣持も心なしか緩んで、宿の湯槽に浸りながらゆつくり旅の間の印象を辿つてゐると、ほのかに惜別の感が湧く。其夜は班長の御心遣ひで九州最後の夜を記念する賑やかな晚餐會が催され、完全に元氣を回復した一同、旅行中の見聞や失敗談に花が咲き夜の更くるを忘れた。

十、極樂で地獄見物

八月十六日(木) 快晴。相變らず暑さ酷し。

快よい朝の微風が鏡のやうな別府灣の海面からしつとりと潮の香を送つて來る。空氣の清澄であるせいか、寝ころんで庭の松越しに見る空の色の美しさ。西南北と三方を圍む鶴見山、高崎山、扇山の翠綠が豪華な天然の屏風を張り繞らしその内に起伏する廣袤六里四方に互る丘陵の隨所に湧出する湯の煙りが温かい湯の街の雰圍氣を醸してゐる。

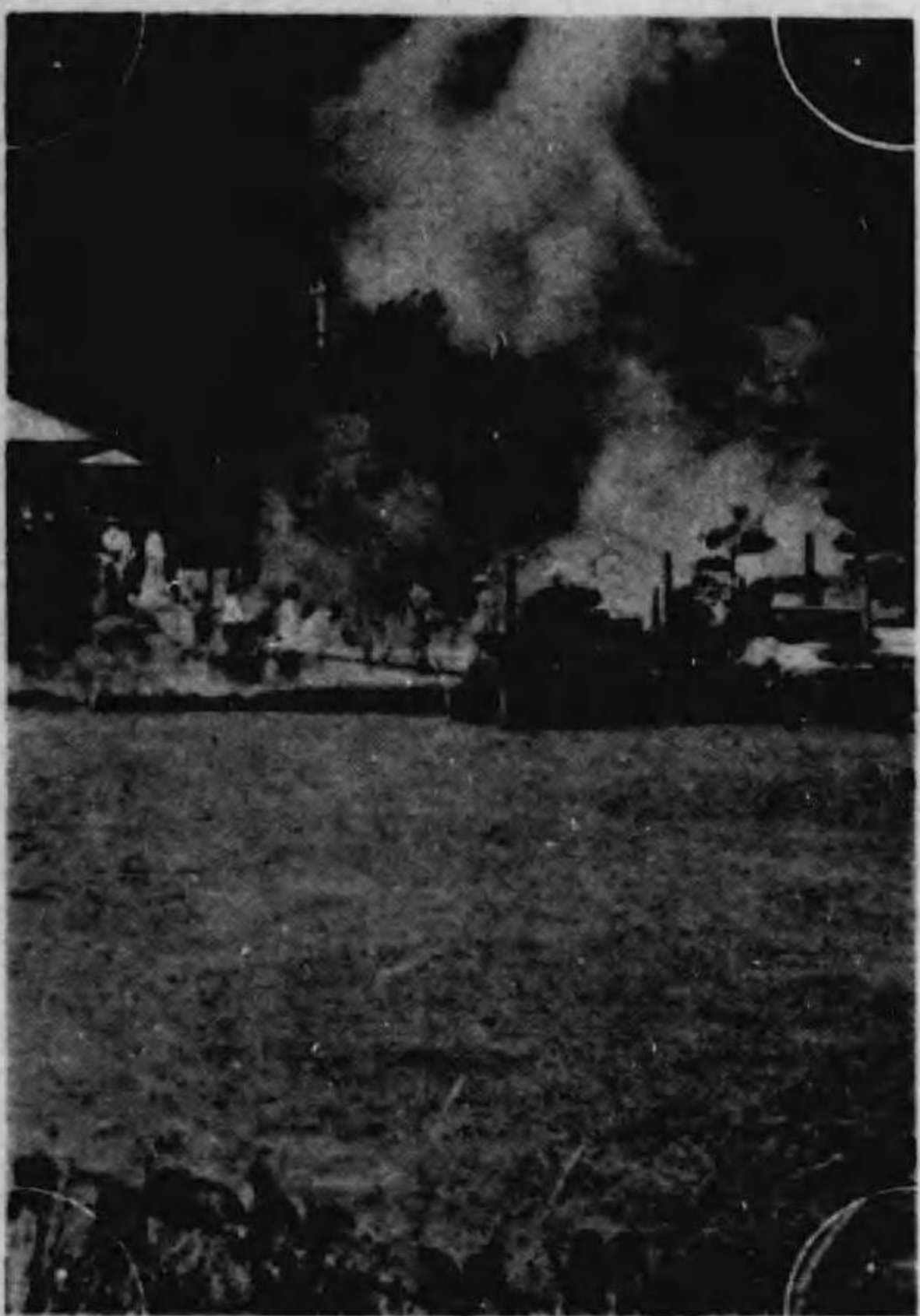
湯の上に浮ぶと云はれる別府では驛の洗面所にも温泉が溢れ、學校や諸官廳の中でさへ温泉の設備

のない所はないと聞く。その天恵のみによつて市制は施かれ年々歳々吞吐する遊客の数は二百萬を越ゆると云ふ。まこと別府は此の世のパラダイスである。

別府此の世の極樂なるに

地獄めぐりと誰が言ふた

その地獄巡りが今日に残された最後の日程である。



海 地 獄

午前九時頃大分農工の支配人野村氏の御厚志に依つて名物龜の井バスが宿の玄關まで横付けされて一同別府地獄巡りの御案内を受ける。大阿蘇登山バスの美聲案内ガールと好一對の「バスガール」の説明が途々別府の全貌を頗る美文的にユーモラスに語り聞かせて呉れる。

別府市近郊に散在する所々の窪地に熱湯

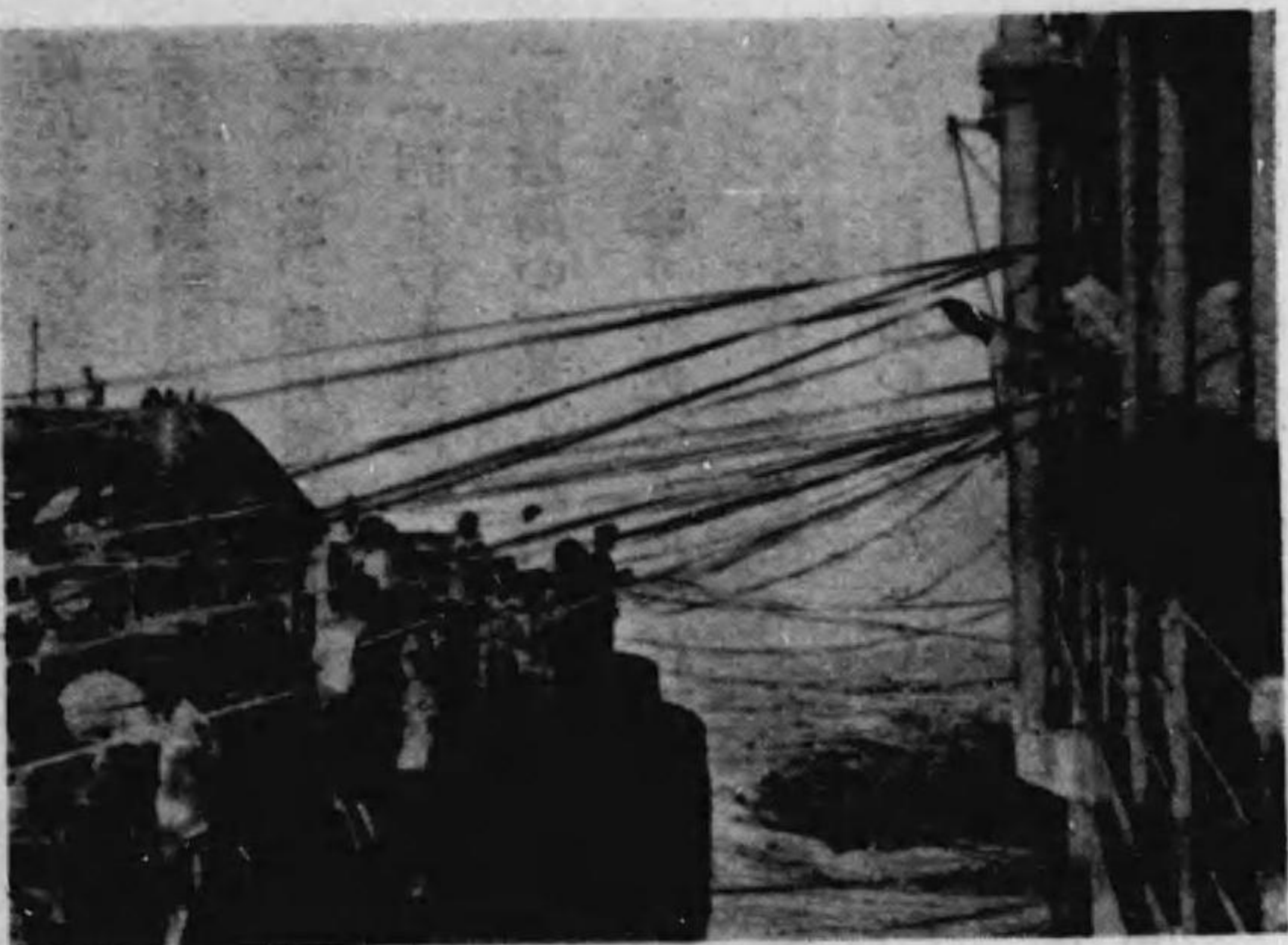
熱泥が沸騰し或ひは猛烈な蒸氣を噴出する處がある。此れが地獄である。その噴出の様、各れも特色があつて悽絶、怪奇の情を起さしむるに充分である。故に地獄の名を生じたのであらう。就中華氏四百五十度の熱湯をたぎらせてゐる海地獄の壯觀。坊主頭に似た形に熱泥を噴出する坊主地獄の奇觀。赤色の熱湯を煮立たせてゐる血の池地獄の怪異など其の名にそむかぬ興味深い觀ものである。地獄地帯を一巡、龜川溫泉場から途を白砂青松の海岸にとつて旅館に歸る。

一同と行を共にせられ何かと御案内の勞を執られた野村氏からは又各自に鄭重なお土産まで贈られ一同感謝の言葉もなかつた。

旅も終りに近づくにつれ忘れてゐた東京のことどもがそろ／＼話題にのぼる。晝食後は留守の家族達へのお土産を求めに三々五々繁華な楠町通りの商店街を漫步、思ひ思ひの名産に、もういゝ加減軽くたつた財布の底をたゞく。

十一、船 旅

午後六時の出帆を前にして大阪商船棧橋に繋がれたむらさき丸がしきりに黒煙をあげてゐる。棧橋には御多忙な時間をさいて業々見送りの爲め出向かれた野村氏の姿が人ごみの中に見える。五



船 出 (府 別)

色のテープが幾十組かの送る人と送らるゝ人との間に五彩の綾を組む。やがて、出帆用意のドラの響き。信號の汽笛出帆のサイレン。ゆるやかに船はすべり出す。陸の人と船の人との手に握られた數十條のテープが繰られ乍らサラサラと訣別のメロディを奏でる。さよならの聲が次第にかすれて、五本十本切れてゆくテープの端がヒラ／＼と夕風に舞ふ。棧橋の人の影も、はては山麓の薄闇にほの／＼と立ちのぼる湯の煙りも次第に視界を遠ざかつて街全體が濃い夕靄の中に塗り込められてゆく。さようなら別府。さようなら九州。切れたテープが五六本、人の居なくなつたデッキの手すりに淡い感傷をそゝる。

低い天井。うす暗い電燈。消毒薬の臭ひが一ぱい立てこめてゐる物置のやうな三等船室。食事は軽うじて餓じさを凌ぐに足りる程度のお粗末なものだつたが、始めての船の旅は一同にとつて嬉しい経験

の一つだつた。豊後水道で浴びた船の海水風呂や浴後のデツキに夜の更くるを忘れて談笑したあの涼しい思出は、夜半の高濱棧橋で求めた水蜜桃の類ひ稀な美味と共に、長く吾々の記憶に新たなことであらう。

八月十七日(金) 今日も亦快晴。

蒸され相な人いきれのため熟睡も出来なかつた苦しい一夜の夢が醒めると、遁れるやうに上甲板に

出る。舷側に近く大小の島々が朝靄の中
去來して、船は屋島近くを走つてゐる。

午前六時。まだすつかり醒めきれない早
朝の高松棧橋に入る。岸壁と路一つ程隔て
内 た高松城の白い望樓が民家の屋根越しに見
海 える。棧橋に蝟集した物賣りの聲が一しき
り喧しい。

寄港三十分許り、船は屋島を右に見て再



び繪の如き瀬戸内海の航海を續ける。肌寒い朝の潮風は浴衣一枚では風でも引き相である。

午前十一時五十分船は豫定より二十分も遅れて三ノ宮埠頭に着く。直ちに自動車で三ノ宮驛に向ひ零時二十五分發の超特急燕で一路歸京の途に上る。

千代田の森の宵空にまたゞ星影漸く明るく、銀座のネオンの光が空を焦し始めたばかりの午後九時二十分、一週間振りに東京驛のホームを踏む。一同手に手に重い包と澤山な土産話をかい込んで疲れも知らぬ様な元氣な足取りで、お互の健康を祝福しつゝ家路へ急いだ。

十二、旅を終りて

旅は終つた。一週間の眼と耳が經驗して來た物珍らしい他國の自然や人情風俗が走馬燈のやうに次々に記憶に蘇つて來て、まだ醒めきれない夢を見續けてゐるやうである。

關門の龜山宮から見下した海峽の賑はひ、九州上陸第一歩に見せ付けられた工業日本の躍進振り、博多灣で始めて接した九州の海の色の美しさ。長崎の古びた市街にたゞよふ懐しい異國情緒。雄大な阿蘇の感銘や別府の街で受けた和やかな印象など恐らく生涯忘れることの出來ない美しい思出となるであらう。

世は非常時と云ふ。俄然擡頭して來た日本研究熱はラヂオに新聞に出版に、何んと多くを吾々に語りかけてゐることか。宗教に國史に、旺盛として日本本然の姿を知らんとする努力が繰返され初めたこんな際に對外的に最も由緒深い九州地方を旅する機會を得て、少しでも吾々の國土に關する實際的認識を深め得たことを思へばその旅行の意義は決して尠しとせない。まして、世を擧げて國難來を絶叫しつゝある時に、力強き充實さを以て營營國防の第一線に立つ軍需重工業地帯の活動に親しく接して益々意を強うし、又博多灣頭に生々しく残る六百年前の大國難元寇の跡を眼のあたりに偲ぶことを得たなど、一しほ今度の旅行に對する感銘を深くさせるものがあつた。とまれ、此旅行に依つて擴められ、新鮮化された見聞がこれからの吾々の日常生活をどんなに豊かにすることに役立つであらう。最後に此の貴重な經驗の機會を與へられた方々への感謝の念を披瀝することに依つて、此の拙なき稿に結尾をつけさせて頂かう。

(完)

瀬戸内海沿岸周遊記録

宮本 彬

出發 昭和九年八月十八日
歸着 同年同月二十四日
一行

班長 六角 壽一

増子 正通

猪瀬 武平

會計 金子 溫知

酒本 喜一郎

記録 宮本 彬

神谷 誠一

神谷 薫

第一日。東京から神戸迄。

午後零時四十五分、東京驛發。

旅に出る喜びが心の何處かに眠つて居た童心を揺り醒して、班長はじめ誰も彼も、皆無邪氣に微笑んで居る。

有樂町も新橋も、何かしら眼新しい感興を私達の胸にもたらし、どうしたら豫定よりもつと愉快に、もつと有益だかなどと語り合つて居るうちにもう横濱。

特急「櫻」は私達の逸る心を知り抜いてる様に、トコトコ西へ進む。

夕陽に映える濱名湖も渡つた。

名古屋城が、黄昏と一共に私達の車窓を訪れた。

ガツタン。(これはやに邪見に「櫻」が岐阜を出發する音)

大垣、米原、とすつかり夜が來て、琵琶湖には九日の月が小波に碎けて居た。

神戸着、午後十時三十七分。流石に鐵道日本は正確である。

「ポーツ」と長閑な笛を鳴らして、高松行の大信丸は波止場を離れた。満員の船室が寝苦しかったので甲板に出て見た。夜風が涼しい。

船は何時か港を離れて、彼方此方の岸々に灯が隣りて居る。蒼黒く横たはるのは淡路島か。千島も聴かず、浪もない。月も落ちてしまった。私達も寝やう。

島も海も寝てしまひけり星明り

第二日。高松から道後湯ノ町迄。

曉闇。所謂瀬戸内海が眼をさました。明褐色の島肌が、淡碧の海の色に呼びかける時、東に浮ぶ鱗雲は、朝陽を迎へて紫から橙へ金色へと輝きをす。刻々に變る雲の波、海の色にみとれて居るうちに高松が見えて来た。

神谷誠一さんが妙な顔をして居るから、どうしたのかと思つたら、「東京見物のお歸りですか」と聞かれたんだと云ふ。顔が餘程四國型に出来てると見える。

午前五時半、高松着。



(てに嶺古談)

直ちに屋島へ向ふ。屋島は思つたより高い臺地だつた。松林の間を縫つて進むと海が見えた。案内人が「皆さん」と立止つたから見廻したら、小亭があつて標柱に「瞰跡亭」。「梨本宮殿下御命名」とある。

眼下に鹽田が見える。「鹽田だね」と聞いたら、「そうです。昔の檀の浦です」と答へた。檀の浦は下ノ關が本家かと思つたら。「あれは壇の浦で、これは檀ノ浦」だそうだ。

俯瞰する檀ノ浦は、那須與市が扇の的を射た跡も、義経が弓を拾つた場所も、それから佐藤繼信の戦没地も、滅亡へくと追ひ詰められて行つた平家と、やがては自分達にも同じ運命が来るとも知らず勝ち誇つた源氏との、血みどろな海戦の跡はみな、鹽田に變つてしまつて居るので一寸淋しかったが、「彼處が平家の船溜りだつた所です」と指された入江が昔ながらに海で居て呉れたので何となくホツとした。

瞰跡亭を少し進むと談古嶺。眺望絶佳。此處で記念撮影。

茶店で土器カハラケを一把づつ賣つて居る。厄拂ひの土器だそうだ。崖から叩きつけて破るのかと思つたら軽く投げるのだつた。

「かう持つて、こんな風に。」と茶店の親父が投げたら、フンワリ風に浮いて柔らかな弧を畫きながらはるか下の松林に消えて行つた。その飛び方が如何にも瀬戸内海らしい和やかさだ。

「よし一つ呉れ。」つて酒本さんが威勢よく投げたらブル／＼よろけながら墜落して行つたので「チエツ」つて酒本さん、まるで義経に逃げられた能登守教經みたいな顔をした。

「ぢや今度は僕がやる」と誰かゞ云つたら俺も／＼としばらくは土器の飛ぶ事／＼。

それから血の池を見て、屋島寺へ。ケーブルカーを降りると待つてた自動車で栗林公園を通つて有名な讃岐の金刀比羅様へ向ふ。

オンヒラヒラ蝶も金刀比羅詣りかな

古人の句にこんなのがあつたが、乾き切つた街道の砂塵と照りつける太陽とで、オンヒラヒラどころではない。四國一だと云ふ藤堂川に水一滴ない旱天続きの野道を走る自動車は相當埃を浴びて、午前十時半、琴平着。

頼山陽が長く滞在して、集ひ来る志士に尊王の大義を説いたと云ふ敷島館に荷物を預けてお山に登る。案内記に段階全てで千二百三十二段とあつたので、身延山のあの石段を想ひ出していさゝか避易

したが（危く棄權しかけた勇士もある。）少し登ると石疊、又少し登ると石疊と云つた工合なので案外楽だつた。

とは云つても俚諺の追風^{オッテ}に帆かけてシユラシユウ／＼／＼と云ふ風に簡單では決してない事は、御本殿に着いた時汗だくだつたのでも分つてもらへると思ふ。参拜を済ませて社頭から眺める下界には青い讃岐平野と、中に取り残された様な讃岐富士とが開けて居た。

敷島館のその由緒ある部屋の、隣りの部室で中食を済ませて一寝入りしてから午後一時九分發の汽車で琴平を出發。

多度津で乗り換へると汽車は愈々今夜の宿泊地、道後湯ノ町に向つて進む。そして讃岐米に知られた讃岐平野が車窓に現れたが。

今夏の四國は近年稀な旱天に喘いで、私達の列車が横切る河と云ふ河、灌漑用の堀と云ふ堀は空しく乾いて、黄色く枯れた稻、白く割れた田圃さえ見受けられる。農家の人々は野井戸を掘つて、炎天下に水を汲んでは自分達の田に注いで居た。ある處では老人が、ある處では子供が、屈強な男達と力を協せて汗にまみれながら井戸を汲んで居るのを見た時、米を作る事を天職と信じて疑はない純朴な人

達の尊い努力に心をうたれて、私達のスケヂュールは雨で滅茶々になつてもいい、この眞剣味に對しても雨が降る様にと、誇張でなく心から祈らずには居られなかつた。(旅を終えた今、東京ではまだ雨らしい雨が降らないけれど、四國のあの人達には降つて呉れたかしら。)

感慨に打たれて居るうちに列車は松山へ到着。それから松山城を迂回して電車で道後へ着いたのが午後六時半。

驛へ降りたものゝ宿屋が定つてない。

「何處にしようか」と驛前で鳩首協議をしたんだから旅はいい。結局宿を見てからと、湯の町をブラ／＼歩いて飛び込んだのが道後ホテル。ホテルなどゝ片假名で怖しては居るけれど案外交際い易い宿屋だつたのは有難かつた。

有名な温泉が殆んど全て弦歌と嬌聲で騒々しいのに引き換へて、道後は静かないゝ街だつた。勿論そうした設備もあるにはあるけれど、街の空氣は穏やかで、行ひすました老僧の閑寂さと、昔ながらに江戸情調をたゞへて居る下町の老舗と云つた風な落着とを持つて居た。只、宿屋に湯がなくて普通り共同浴場迄出掛けて行くのは少し不便で、あまりに舊習に拘泥しすぎると思ふ。

夕飯後、街を散歩して、漱石の「坊ちゃん」を偲ぶ。然し「赤シャツ」も「坊ちゃん」もそれから「野ダイコ」も見當らなかつた。たゞ「マドンナ」らしい影は通りすぎたけれど。

第三日。道後湯ノ町から別府迄。

午前七時半道後發。

午前九時。董丸に乗船、高濱發。(高濱の桃は全く美味しかつた。)

船が進むに連れて海の色は淡碧から濃紺へと變つて何となく外洋と云つた感を私達に與へる。

やがて船室で將棋が始る。が兎角自信と實際とは一致しないものと見えて、天才、神谷薫さん(但し自稱)どうも形勢不利、連戦連敗だ。

うるさい方が負けて居るへボ將棋

晝食後、今度は甲板で輪投げの點取りをやつたが、最高記



録は酒本さんの四十六點、最低記録は六角さんの零點。とは云へ酒本さんの四十六點は跳ね返つて入つたりよろけて入つたり可なり幸運な四十六點だつた。

長濱を出てしばらくしたら九州の山々がいよ／＼近付いて、やがて別府が見えた。東洋のナポリ、世界の温泉の都と自讃するその別府の街が。

ロープが棧橋に投げられて、銅羅が鳴つて、シャツ／＼と推進機が泡を吐いたら、船はやつと横付けになつた。豫定通り午後二時。

旅館高砂の番頭と共に、大分農工の支配人野村さんと庶務課長町田さんがお忙しい中を出迎へて下さつた。

温泉に入つて一と休みしてから野村さんの御好意で貸切バスを驅つて地獄廻りをする。

バスが大通りを出たら女車掌が「これから地獄廻りの御案内を致します」と云つたかと思ふと急に大きな氣取つた聲で、

「こゝは名高き流川、情も深き湯の町の——」とやりだしたには此方で却つてテレちやつた。併し七五調での説明を聞いて行くうちには段々馴れて来て、

「左に見える建物は、此處はお國を何百里、離れて遠き滿洲の、その滿鐵の療養所でございまーす」と云ふ頃には「ございまーす」は何處かで聞いた様な聲だなど考へる程餘裕が出た。そしてしばらく考へてやつと分つた。伽羅仙臺萩御殿ノ場で千松が「侍の子と云ふ者は腹が空つても餓うなあい。」と瘠我慢をするその「なあい」と同一音階だと云ふ事が。

地獄廻り後ケーブルカーで展望温泉に到着。浴槽から別府を見たり、泳いだりした後、やはり野村さんから晚餐の御招待に預り、充分歡を盡して、(娘子軍の突撃急、危く捕虜三名を算する所)宿に歸つたら、海岸の櫓で別府音頭が歌つて居た。

虹は由布から縁は湯から

戀しお方は瀬戸越えて

私達は間違ひなく瀬戸を越えて來たけれど戀しお方ではなかつたと見えて、街の人達は見返へつても呉れそうになかつた。

第四日。別府より別府迄。

午前八時二分。別府發。阿蘇山に向ふ。大分で熊本行に乗り換える時、階段で上つた増子さんが、

「おういた」と云つた。完全に痛い洒落と云ふのはこう云ふのを云ふらしい。

豊後竹田からは勾配が益々急になつて、阿蘇外輪山めがけて突き進む車輪の音も「トツテモツカレタ、トツテモツカレタ」と聞えて来る。

丁度竹田から乗つた土地の人が「あれが阿蘇です」と教へて呉れたのがきつかけで、親切に附近の事を説明して呉れた。

「この邊一帶、阿蘇外輪山迄の高原は波野原と云はれて居ますが、九州アルプス久住山迄續いて居ます。温度は普通竹田で八十五度位の時、此の邊は七十八度位です。土地は火山灰なので、米作に適しませんから、主に薩摩芋、玉蜀黍トッモロコシを作つて居ます。米田にしようと種々努力して居ますが、うまくいかんようですね。

又この邊一帶は竹が非常に取れますので、東京邊の釣竿屋さんが毎年採りに來ますよ。(竹は大分とれると見えて、汽車辨當の箸も、別府の宿の割箸もみんな竹だつた。)

獵にもいゝ所ですよ、こゝは。私も趣味で關東、北陸、關西と随分歩きましたが、此處程恵まれた所は他に知りません。私が一番とつた時は雉を四十羽でしたからね。えゝ、兎などは、とても多いの

ですよ。一人では持ち歸れない位とれます。何ですか、あゝ、あれは阿蘇五嶽の一つ根子嶽です。峻險なのでとても登れませんかから大きな鷲などが棲息して居ます。」

瀧水でその人に別れて隧道を三つ四つ抜けたら、もう外輪山を越えて居て、火口原阿蘇谷を走つて居た。午前十一時五十六分、坊中着。遊覽バスで頂上に向ふ。

行く程に、外輪山から阿蘇谷、火口丘、と縁に蔽はれた雄大な複成火山、大阿蘇が、私達の前に、後に、車側に、展開して八月の太陽の下、縁を孕む爽快な風。「いゝねえ。」と誰かと思はず歎聲を發する。

此處のバスでも、案内ガールが七五調で説明して呉れる。登山道は工費二十萬圓、平均勾配十九分の一だの、あの外輪山の突端は蘇峰先生が大觀峰と名付けただの、五嶽の谷間には鳥が鳴き、高山植物が咲いてるのだの。そして時々「實に美しき眺めでございます。」と勝手に決めてしまつて、歸りには歌まで唱つて呉れたから嬉しい。

山上神社から途中とは打つて變つて殺風景な火口を覗いて坊中へ降りて來たら時間があつたので次驛宮地迄自動車を驅つて、阿蘇神社に參拜する。肥後開關の神建盤龍命を祀るこの社の樓門は桓武帝

の皇居の制を模したものだそうで、古趣に富む立派なものであつた。

宮地發午後四時二十三分。

別府着午後七時二十六分。

驛を降りたら宿屋の番頭が「お歸んなさいませ。自動車を待たせてあります」とまるで自分の自動車見たいな事を云つて迎へに来て居た。夕飯は伴奏付きで済ませる。

第五日別府から別府迄。

別府も三日目になると少し馴れて、旅行して居る氣持から滞在して居る氣持に變つて来る。荷物や土産物などを整理して居るうちに自動車が来て、午前十時半愈耶馬溪迄往復百二十哩、四十八里の下ライヴに乗り出す。

八幡地嶽から道を左に取ると海拔千三百七十五米の鶴見嶽が眼前に迫る。「山の何方側を廻るんだい」と聞いたら「越えます」と答へた。

山腹の急勾配を九十九折に自動車が登り出すと別府灣が見えて來た。眺望は良くなつたけれど片方は切り立つた崖なので少し氣味が悪い。「あの邊が近江の琵琶湖に似てると云はれてる所です」と運轉

手の奴、他の氣も知らないで片手をハンドルから離して説明する。

二度ばかりは我慢したけれど三度目にはとうとう我慢出来なくなつたと見えて「説明は口だけで澤山だよ」と助手臺に乗つてた金子さんが悲鳴をあげてしまつた。

登り切つて豊後富士（由布嶽）を右に眺めながら行くと鬼石原。奈良の三笠山をも少し廣く變化多くした様な所だ。別府から夕涼みがてらドライブする人が多いと云ふ。

又一つ峠を越えたらやつと平地に出た。埃つぽい街道を進むとやがて玖珠町。「あ、登記所がある。」と猪瀬さんが見付けて懐しがる。それからしばらくは東京の事、登記の事など話が弾むまゝに車は筑後川を越えて、やがて深耶馬溪だ。

紅葉谷の水と岩と樹とが富士の樹海を想はせる美しさだつた以外、兩岸に突立つて居る岩石も、チヨロ／＼情けなく流れて居る山國川も、天下に聞えた耶馬溪としては、期待が大き過ぎた故か物足りなかつた。殊に深耶馬驛の山陽擲筆岩から青の洞門迄は岩と水とがあまりに離れすぎて素漠とした感じだつた。

百年の歳月が耶馬溪の眞價を傷けてしまつたのか、私達の審美眼がなつてないのか、それは知らな

い。けれどもあれ位の景色で讃歎筆を擱かなければならなかつた頼山陽が氣の毒になつた位だが、それとも山陽の文人としての感覺が鋭すぎたからかも知れない。

がとにかく私達にとつて耶馬溪は景色よりも、羅漢寺の古典味、青の洞門の傳說的興味を持つて居ると云ふ點でのみ魅力があつた。

だから私は中津に向ふ街道に幼少時代憧れの豪傑、後藤又兵衛基次手植の杉を見付けた時の方が餘程嬉しかつた。

午後五時半、宇佐着。宇佐八幡に参拜。

官幣大社宇佐神宮。清淨な神域、壯嚴な社殿。脱帽で進む私達はこの社の醸し出す崇高な雰圍氣に氣壓されて話をする者もない。

神護景雲年間の非常時日本に正しき日本をお示しなされた御神託は千歳の後、尙赫々たる神威を、和氣清麿の忠誠と共に傳へ給ふを想へば、現時日本と想ひ合せて、私達の胸を強く深く撃つものがある。

「さあ愈、別府です。」参拜を終えて車に乗つたら運轉手君、アキセル、ペダルを踏みながら張り切つて

居る。やつと自分の町へ歸れると思ふと嬉しいんだらう。私達も疲れた。早く湯に入りたい。途中で日が暮れた。曲り曲つて山を越えたら灯が見えた。「別府です」と運轉手頼に生色を加へる。展望温泉の灯が瞬く。高崎山が黒く近付いて来る。旅館高砂にやつと着。湯に入つてホツとする。

第六日。別府より廣島まで。

午前七時四十五分、別府發。

さて出發となると別府の町もたゞ行きすりの街とだけは思へない。仄かな惜別の情が湧く。一週間の旅ももう直ぐ終るのだ。歸途への汽車に乗つて居ると、やつぱり東京が戀しくなる。何と云ふ事なしに旅愁と云つた様なものが胸をかすめるのも、旅人の持つ感傷か。

昨日訪れた宇佐も、中津も過ぎた。關門海峡も渡つた。本州の土を踏むのも一週間ぶりだ。車中でこの一週間歩いて來た道を振り返つて見る。「愉快だつたね。」「よかつたね。」と誰も彼も一様に満足して居る。そして更に「毎年やつて貰へるといいね」と云ふ事に一決する。

午後四時四分、宮島着。下車して嚴島神社に参拜。

私達の胸に日本三景の一として子供の頃から生きて來た所謂安藝の宮島だ。鳥居がある。廻廊があ

る。鹿も居た。廻廊では案内人が義務的な説明をして呉れた。宮島はあまり有名すぎて名所擦れがして居る。夕食後廣島へ行つて街を見物する。

第七日。廣島より東京迄。

午前零時二十七分、廣島發。特急「櫻」は眞夜の山陽道をひた走りに走つて居る。もう乗つてさへ居れば東京迄運んで呉れる。東京の街が私達を待つて居る。一週間も同じ方向へ、同じ目的で歩いて來て、今迄より一層、親しい連鎖がお互ひの間に湧いて來た事は事實だと思ふ。

午後四時四十分、東京歸着。

夏の一週間をこんなに有益に快適に過す事の出來た旅行を、又催して頂ける事を祈りながらこの記録を終る。

(了)

信越温泉旅行記

信越温泉班 田 中 勇

我が班は八月二十六日離京して浅間温泉、上高地、赤倉温泉、野尻湖、長野善光寺、上林温泉、別所温泉を見物して同月三十一日歸京したのである。

此度當行で行つた旅行の趣旨は今迄の有樂會の春秋例會の時に旅行せざる遠隔の地方に赴かうといふにあるので或ひは九州地方に、北海道地方に、南畿地方に、十和田湖方面等にと各自の希望に従つて行員一同班を分つて旅行することとなつたのであるが餘り健康ならざるものかとか病後靜養中のものは到底かゝる長途の旅行に堪えられぬので身體に樂の出來る近傍地方を週遊するといふ方針の下に信越温泉廻りといふ一班が設けられたのである。

最初我が班への加入希望者は十五名にも達し二班に分つて行かうといふ話があつた程であつたが病氣その他の事故のため次第に脱退するものを生じ最後には僅かに生駒團長、馬場氏、滿岡氏、鹿倉氏、村澤氏、石田氏、佐久間氏及び私の八名に減じたのである。

旅程については最初ジャパン、ツーリスト、ビューローに依頼して信越温泉廻りの旅程及び費用概算を調べて貰つたのであるが、これを参考として打合せをする必要を感じ八月十日営業時間後に一同集合の上長時間に亘つて協議して今回の決定案を作成したのである。

次いで二十五日には支配人より旅行についての心得が説示せられた。即ち旅行中は一致團結し出来る限り個人的行動をとらざること、旅費は豫算内で賄ふこと、旅行先より絶えず銀行宛に便りをなす様にとのことであつた。

尙生駒團長よりは携帶品のことについてお話があり尙明日は午前八時十分迄に新宿二等待合室に集合する様お示しがあつた。尙旅行中の汽車、自動車、電車一切を含む周遊券が一同に配布せられた。

以下最初三日間に於ける我が班旅行先の模様とその時々^{ふ。}に於ける拙い感想とを簡単に述べやうと思ふ。

八月二十六日 本日は午前八時三十一分新宿發長野行に乗車することになつて居る。天氣は悪く時折霧雨さへ降つて居る。

八時頃三人の班員が先づ驛に集つたので、他の班員の來集を待つため一人が待合室に残り他の二人

が場席を占領しておくため列車の中に入つて行つた處が既に場席の大部分は塞つて居たので七人分の席を取るのにも非常に骨が折れた。八時二十分過ぎには一同全部乗車した。一人は所用のため昨日出發し辰野で我々の車に乗ることとなつて居るのである。

一同の顔は喜びに満ちて極めて元氣である。これより一週間の大して骨も折れず楽しみ多き旅行を夢みて居るので一同ゆつたりした氣分で軽いユーモアに富んだ雑談を交はして居る。間もなく發車。東京府内を走つて居る間には時折雨が降つて居たこともあるが小佛峠を通過して山梨縣に入ると間もなく快晴となり青空も見えて幾分暑くなつて來た。大抵の者は上衣をぬいだ。汗さへ幾分にじみ出て來た。甲府驛で辨當をとる。富士見驛を過ぐる時此驛は内地で最も高い位置にある停車場であると説明する者があつた。滿々たる水を湛へた諏訪湖が窓外より消えて間もなく辰野驛に到着、窓から顔を出すと我々より一足先に出發した一班員が走つて來て我々の車に同乗した。

午後三時二十一分愈々松本驛に到着、此處から直ちに淺間温泉に行つても少し早過ぎるので時間を有効に利用するため一同松本城參觀を志したのである。驛を離れて舗裝道路を行くこと約十町外濠の橋を渡つて松本中學校の構内を横切ると先方に城址が見える。其前は廣場になつて居て幾組もの團體が

野球に興じて居る。城の後方には大きな内濠を控へ石壘が廻らされて居る。

松本城は五層六階建の小天守、一階建の月見櫓、二階建の巽小天守、二階建の渡り櫓、二層四階建の乾小天守の五棟より成立つて居る。數個處の階段を上つて小天守の頂上に至つた。窓からは松本の町々が手に取る如く眼下に見下される。又西方には北アルプスの連峰、東北には浅間山が聳えて居るが徒らに雲多くしてその全貌を看取出来ぬのは残念である。涼しい風が絶えず流れ込んで来る。一同よい氣持になつてしばし窓外の風景に見とれて居たのであつた。

此城は四百三十年前永正元年後柏原帝の御代に島立右近貞永によつて築造せられ建築材料の大部分は今尙昔の面影を残して古色蒼然として居るが、其後に至つて修理せられた形跡のある場所も多かつた。「夜などにこんな所に入ると氣味悪く化物が出て來さうだ」などと冗談を云つて居るものもあつた。此處を下り城内を一渡り參觀し最後に月見櫓で記念の撮影を行つた。再び中學校の構内を横切つて町に出て暫く休息後浅間温泉行きの乗合自動車に乗車した。平野の間の道路を走ること約十五分て浅草温泉富貴之湯旅館に到着した。

此地は松本驛の東北約五軒海拔七百米犬飼山の松林を東北に負ひ、女鳥羽川の清流が西を走り西方

一帯の地は田畑遠く開け梓、奈良井の兩川を隔てて遠く乗鞍、穂高、槍ヶ岳、常念岳、東天井岳、燕岳などの日本北アルプスの高峰等雄大なる展望を恣にし得る温泉地なのである。

寒暖計は攝氏二十六度を指して居る。一服の後戸外を見ると巡查が諸處に立つて居る、李王垣殿下が公式で我が宿の直ぐ前にある小柳旅館に御出でになるとのこと、我々一同も宿の門前迄お迎へ申し上げた。小柳旅館の向つて左側の三階の廊下の外に簾が下げてある。その部屋に御泊りになられるのであらう。一同風呂に入る。タイル張りの風呂場で湯の温度も適度である。この温泉は無色透明の鹽類泉であつて皮膚病、胃腸病、呼吸氣病等に特效があるとのことである。夕食後町内を散歩し一同明日の上高地行を楽しみつゝ床に入つたのは十時過ぎであつたが蚊のため安眠を妨げられた者もあつた。

八月二十七日。一同離床したのは七時頃である。本日は愈々日本八景の一たる上高地見物の日である。色々考慮の末「タクシー」二臺に分乗して行くことにした。距離は十四里あるとのことである。

九時出發原野の間を進むこと約十分にて松本著。こゝより約二十分梓川の長い橋を渡ると間もなく島々である。これより車は梓川の溪流に沿うて走ることとなる。道路はよく出来て居るが路傍の高い所に岩石が露出して居て崩れて來たならばと思はれる所が方々にある。運轉手の言によれば今回宮様

方がお出でになるので道路を大修繕したとのことである。かゝる道路を走ることの出来るのは誠に好都合であると思つた。

氷河石が彼方此方に現はれて居る。太古時代には此邊も氷河時代を経て來たのではあるまいかといふ學者の説を思ひ出した。道路の彎曲甚しい處が多く先方より自動車に現はれて急停車する度毎に全くひや／＼させられる。

車を進める中に左側の溪流の上に東京電燈、京濱電力、梓川電力の發電所が相次いで見える。何れも大規模な設備が施されて居る。

溪流は道路の幾十尺の下遙かに見えるかと思へば又道路の傍を流れることもある。川向ふの常磐木の緑が岩の上をさら／＼流れる清流に映つて溪谷美を飾つて居る。

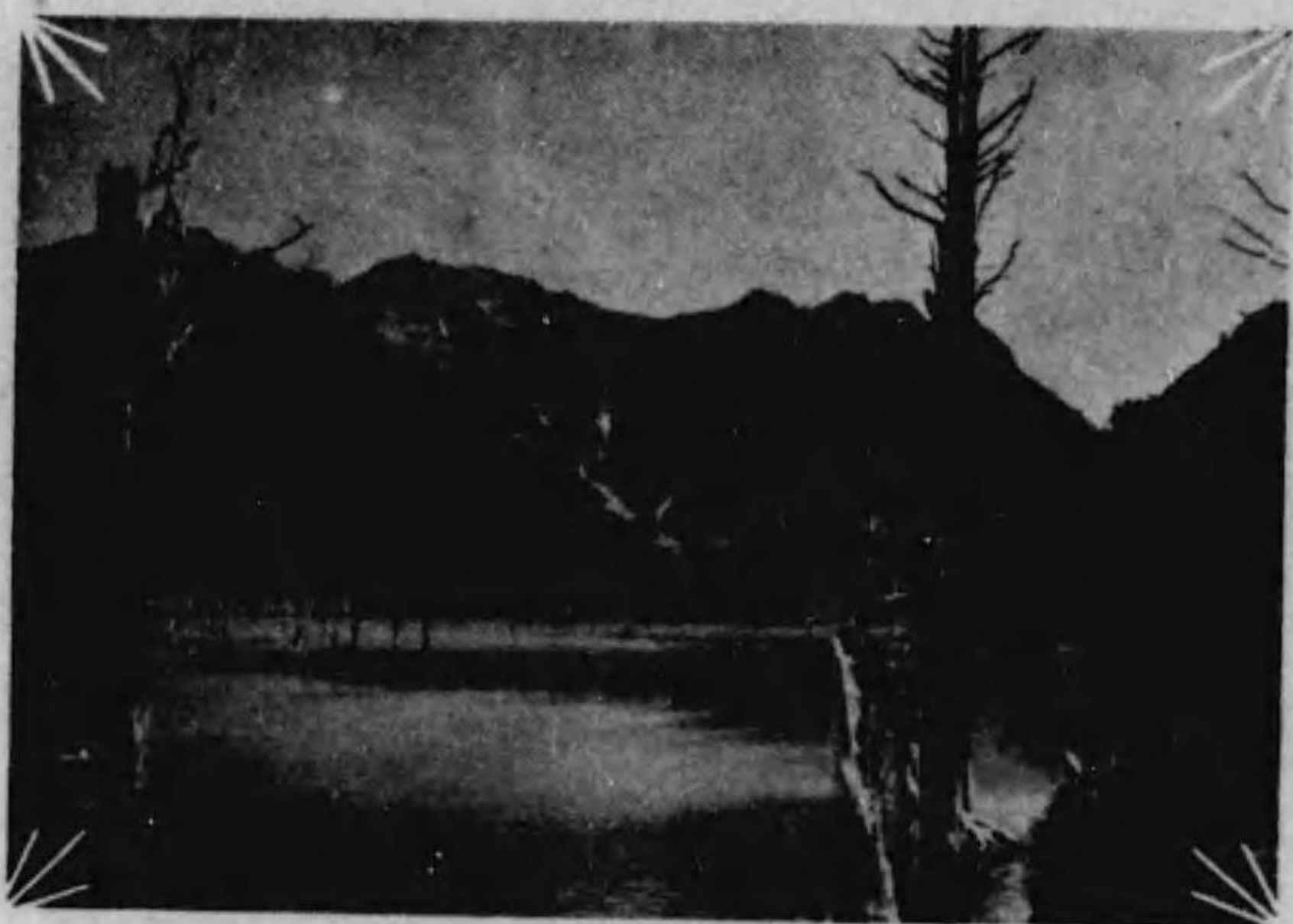
長い釜墜道を出ると間もなく大正池が現はれた。下車して池畔の廣場に立つて池を眺める。

大正四年六月池の左方に聳える焼岳の噴火の際噴出した熔岩が梓川の流れを塞いで作り出されたのがこの池である。白骨のやうな白樺の幹ばかりが焼け残つた池の中に林立して居るが數年経てば或ひはこの珍しい池中の白樺も姿を消すやうになるかも知れぬ。

正面には穂高の連峰が雲間に高く立つて居る。峰近くのひだ／＼には雪溪が輝き高山氣分を遺憾なく現はして居る。この大自然を背景とする一同をカメラに収める。

再び乗車。數分にして上高地ホテルに到着。時に十一時半であつた。入口傍の賣店で繪葉書を買ひ各自旅よりの便りを書くに忙しい。

このホテルは帝國ホテルが經營して居るのであるが所謂山岳ホテルで瀟洒な「スイス・ゴツテージ」風の三階建である。一見粗雑な建築方法の様であるが仲々贅澤な材料を使用し内部の造作が凝つて居る。秩父宮殿下同妃殿下が一週間以前より御滞在の由であるが今日は朝五時頃御出發なされて焼岳登山ホテルは現在殿下御付きの人々及び其他の客で部屋は満員になつて居る。



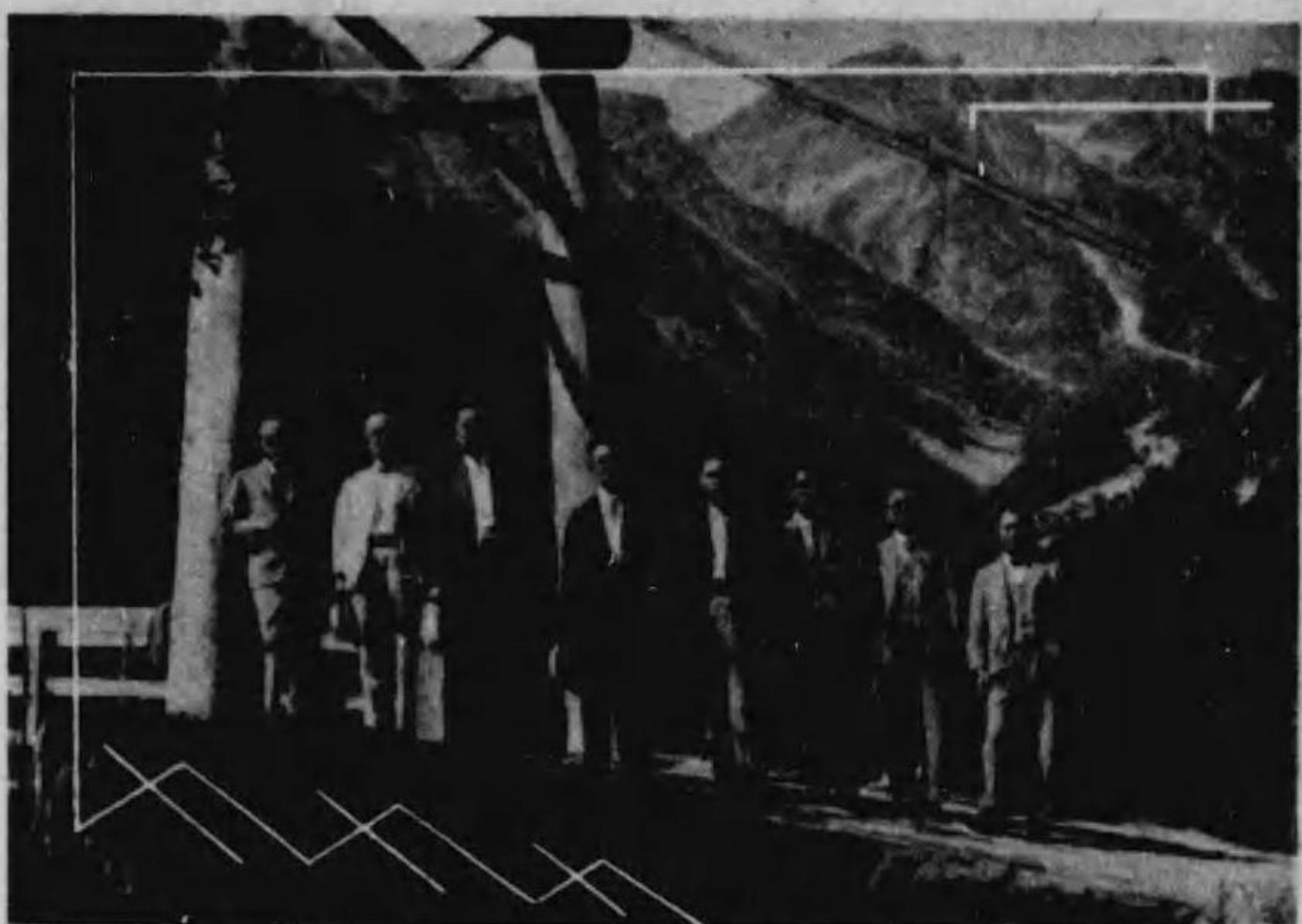
山をお試みになられたとのことである。なつて居る。

間もなく晝食の用意が出来る。食堂に行くとき服装を正して行く様特に「ボーイ」から注意があつた。寛いで緩くり食事を取りたいものであると口々に言つて居る。

食後裏のベンチで休息する。日はぼか／＼とあたり幾分汗がにじんで来る位である。よい日向ぼつこで同時の移るのも忘れて談笑に耽つて居る。この悠長な場面もカメラに収められた。是非秩父宮殿下を拜し奉らうと暫くお待ち申上げて居たが夕刻近くでないと御歸還なされぬとの知らせがあつたので已むなく此處を出發廣い道路を進んで行く。道はきちんと造られ自動車が行した跡もある。道の兩側には白樺が針葉樹の間に点在して居る。木の相當上の方迄大分剥ぎ取られて褐色の肌を出して居る。深い公憤を感じざるを得ない。一部の人々の利己的な心が充されるためには如何に自然の美が害されねばならぬかわからぬ。

行くこと十町餘にして五千尺といふ旅館がある。質素な宿である。奇妙な名であるが上高地が海拔約五千尺あるのでそれに因んでかゝる名を付けたとのことである。

この宿の前梓川には大きな釣橋がかゝつて居る。河童橋である。橋上よりの眺めがよい。北には一萬幾百尺の穂高が高く天を劃つて聳え南には焼ヶ岳が盛んに噴煙をあげ、橋下の清流擧つて麗しいハ



ーモニーをなして居る。此處で寫眞屋をして橋の袂に立つ一行を撮影せしめた。

梓川に沿うて下ること數町にして温泉ホテルに着く。

此の旅館の舊館は相當古びて居るが新館は最近建てられたもので新しく氣持がよい。我々は部屋の場合で舊館の八疊二間續きに通された。嘗つて秩父宮殿下も我々の部屋の隣りに御泊りになつたことがあるとのことである。

窓外を眺めれば六白山霞澤岳等の岩山が梓川を前にして聳えて居る。

小惣後風呂に入る。當温泉は梓川河畔の角閃花崗岩中の裂目に湧出する無色透明の温泉で胃腸病、リウマチス、婦人病、神經衰弱症、皮膚病等に特効があるとのことである。

湯は相當に冷温である。己むを得ず相當永く浸つて外に出ると身體中が大分暖くなつた。温度は低

くとも温泉なので身體の中心が温まるためであらう。

宿の人の話によれば雨が降るとこの温泉は暖くなるとのことである。電氣の設備はあるのに暗くなつてもあかりがつかぬ。ふと見るとランプを持つて来た。わけを聞くと電線は来て居るが隣りの清水屋旅館と争ひ事があつて電氣を使用せぬ。即ち温泉の引いてない清水屋旅館に自己の温泉を使用せしめぬ代りに自己の方では電氣を使用せぬこととなつたとのことで、四五年前より此状態が続いて居るとの話である。種々事情はあるにしても馬鹿げたことである。

膳を圍く圍んで一同夕食をとる。薄暗い「ランプ」の燭の下でしんみり談笑しつつ食事する落付いた氣分は仲々味へぬと一同却つて大満足であつた。

我々は丹前を着て居るのであるが相當涼しい。食後階下に行くとき美髯の老人を初め數人が爐を圍んで陽氣に雑談に耽つて居る。見ると一坪位の爐である。中に白樺の大きな切株がくべてあつて火がかん／＼におこつて居る。我々一同もその傍に坐した。からだの前の方は暖いが背の方は大分寒い。老人はこの家の主人である、否當ホテルは會社組織になつて居るので、社長なのである。同氏は東京の人で土木事業に關係して居るが時折當地に来るとのことであつた。考人は話好きである。白樺の切株

を大きい儘爐に入れるのはこれを細かくするのに非常な勞力を要するからであるといふ。同氏は白樺は細工物を作る以外何等役に立たぬのでこうして火にくべて終ふのであると恰も白樺を儘子扱ひにして居るかの如き様子である。

この爐といひ、「ランプ」といひ共に山の宿らしいなつかしい感を我々に與へるのである。この宿の様子は永く我々一同の記憶に残ることであらう。

昨夜一同睡眠不足であつたので今夜は早く寝ようと云ひ出し食後間もなくめい／＼床に就く。やがて窓外を見ると前の山の一端から月が離れ出た。薄紫の空に十七夜の月がかゝり前の梓川に映つて小波に碎け、前の山々が薄黒くほんのり浮び出て来た景色は美事な山水畫を見て居る様に思はれた。時候に恵まれかゝる風景を眼の當り恣にすることの出来たことを一同心から喜んだのである。

八月二十八日。昨夜は早く就寝したので今朝は一同元氣よく床を離れた。大分涼しいなと思つて寒暖計を見ると攝氏十一度である。梓川のほとりを逍遙する。水の中に手を入れるととても冷い。水から水蒸氣が立昇つて居るのが見える。日光を受けて空氣が温められて居るのに水が依然として冷めたためであらう。やがて軽い食事が運ばれた。食後机を圍み火鉢を前にランプも下げて當ホテルの氣

分を充分に出す様にして撮影した。

此處に来て特に感じたことは山の宿のため食物が餘りよくないから暫く滞在せんとする者は罐詰類を持參して來ると好都合だといふことである。八時頃當ホテルを出發。穂高、燒岳等の登山、明神池附近の散策等は次の機會に割愛して梓川に沿うて下ること數町、左に橋を渡り白樺の點在する野道を行くこと數町にして再び上高地ホテルに出る。道々キャンプが設けられた跡を見た。

温泉ホテルより自動車會社への交渉方法が當を得なかつたためタクシーの都合が悪く一部の者は乗合代用のタクシーで他は乗合自動車にて山を下ることとなつたのである。

安曇村迄差しかゝると李王殿下が淺間温泉より上高地にお出でになるとのこと一時通行止となつた。お待ち申し上げること約一時間半にして殿下には自動車で山を上つて來られたのである。一同拜すると一昨日の御服装と同様軍服を召して居られお元氣で居らせられた。

當地を出發し再び溪谷に沿うて走り松本に到着、長野行に乘車する。やがて姨捨山驛に著く。此驛より姨捨山が見下される。此處は田毎の月で有名である。明月の夜には段級をなす田毎に月影が宿され美觀を呈することである。

間もなく窓の右方に妻女山、又左方に茶臼山が遠く現はれた。かの有名な川中島の戦の時上杉謙信と武田信玄が各この兩山に陣取つて互ひに秘策を廻らしたのである。かくて數年に亘り精根を盡して戦つた原野の中央を今走りつゝあるのである。

長野驛で新潟行に乗換ふ。此處で赤倉の御別荘に向はせられる久邇宮大妃殿下、同朝融王殿下を圖らずも拜することが出來た。四時二十三分田口驛に著く。

驛の前にずらりと小學生が並んで宮様をお迎へして居る。「タクシー」で走ることしばし先方のスロープの中腹に小じんまりした洋風の別荘が見える。運轉手に聞くとあれが久邇宮家の御別荘であるといふ。赤倉温泉香嶽樓にて下車。

此地は妙高山腹に位して居り前方に廣々と開け行く裾野を一眸のうち収めることが出来る。此地一帯が有名なスキー場となつて居るのも道理であると思つた。此の土地の人は冬期隣村に赴くときはスキーをしながら行くことである。香嶽樓はこの大スロープ地帯をその儘自己の庭園となして居るが如き觀がある。天氣がよければ遠く水平線に近い處に日本海が現はれ佐渡島も幽かに姿を見せるとのことであるが生憎雲が多くて駄目であつた。又南方の妙高山も大半雲に隠れその偉容を見ることが出来た。

の出来なかつたのは返すくも残念であつたが香嶽樓はその眺望といひ設備といひ誠に氣持がよい。各地の温泉に行つたことがあるがこんなよい温泉は初めてだと讃辭を惜しまぬ者があつた。

我々に充てられた部屋は十疊と六疊との二間で美景に直面した場所である。暫く休憩して後入浴する。タイル張りの大きい氣持よい風呂場である。この温泉は此處から四軒離れた妙高山の北地獄から引いてあるものでリウマチス、腺病、婦人病、神經諸症、皮膚病等に特効があるとのことである。

洗面所の傍には使ひ古したスキー道具が數個立て掛けてある。スキー温泉宿の氣分を示すに相應し。

涼しい風を滿喫しつゝ夕食をとる。食後寛いで談笑に時に過すものもあり又旅先よりの便りを書くに忙しいものもある。思ひくゝに床に就く。かくて旅程中前三日間は無事終了したのである。

佐久間常夫記

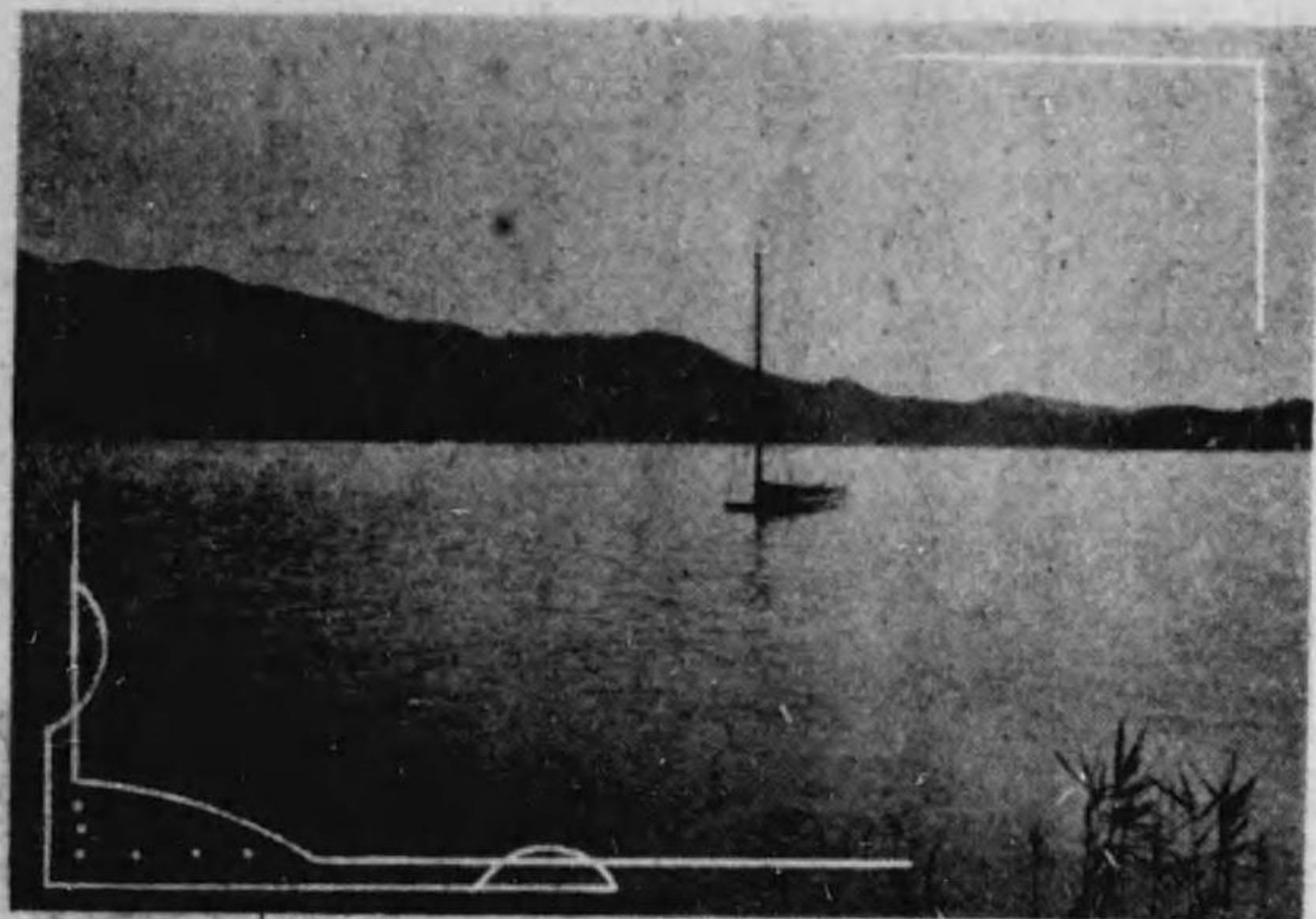
八月二十九日。昨夜からはびこり初めた雲は今日もどつしりと秋の空を壓へこの旅舎からの眺めも心憎きまで朦朧としてゐる。海拔二千五百尺、日本海の蒼海を見下し渺茫たる間に佐渡ヶ島を彷彿せしめる赤倉の絶景をとしばし晴れやらぬ空を眺めて恨めしく思つた。越後富士とも云はれる姿の美しい妙高山を負ひ黒姫、長範、袴岳、斑尾の峻嶺重疊の間を一方北だけが開けてその裾の起伏が滑らかな曲線で頸城平野を霞の中に延びる。その間大木なく一二尺ぐらひの雜木の原は遮るもの無き且々たるスロープ、私は雪の景色を想像し絶好のスキー場に今更感嘆した。赤倉の眺めも決して悪くはない。こゝへだけ來れば確かに眺望絶佳の讃辭を呈すべき價値はある。しかし我々は昨日上高地の爽快絶語の風光に接しあまつさへ天赤倉に幸せず、佐渡はおろか遠望全くきかず、唯野尻湖らしいものが霞の中に鏡を投げた様に光るのが見えるのも遺憾であつた。

午前十一時香嶽樓を後に池ノ平、妙高と連らぬる高原を経て田口より野尻湖に着く。その間約三十分、越後に入つて道路の悪いのと自動車賃の高いのに驚く。田口赤倉間の二圓五十錢赤倉野尻間の四圓五

十錢は信州のそれに比して非常に高い。野尻湖は海拔二千二百尺の高所にあり、周圍三里。昔東の斑尾山西の黒姫山噴火の爲め上流下流共に埋められて生じたる堰塞湖で湖中の琵琶島には辨天祠を祀る。湖面には斑尾の翠巒を映し遠く妙高、黒姫、飯繩の諸山を仰ぐ。ボート・ヨットを浮かべ輕井澤と共に避暑地として外人間に喜ばれ右手の小高い山腹には洋風の別荘が散在してゐる。暫らく静かな湖畔を散策しバスで柏原に向ひ午後一時二十四分の信越線で長野に向け出發す。

二時十三分長野驛着。一行の村澤氏の義兄にあたる内田氏邸にて信州本場の蕎麥の御馳走になる。いゝ香りだ。信州の人に云はせると東京の蕎麥の方が美味いそうだ。汁は悪いかも知れないが蕎麥そのものゝ香りは確かにいゝ。

少憩の後善光寺に參詣す。丁度赤倉へ行く時同じ列車で赤倉御別邸へ向はせられた久邇宮、同大妃殿下を再びこゝで拜



し奉つた。「牛にひかれて善光寺詣り」と昔から一生に一度御詣りしなければ未來は極樂へ行けないと云ふ。善光寺はこゝに説明する迄も無く我が國に初めて百濟より經卷と共に奉獻せられた佛像を大匠蘇我稻目その子馬子により信仰されたがその年厄病が流行したのもこの佛像がある爲めと物部、中臣二氏の反對に遭ひ難波の堀江に投ぜられた。これを信州の人本田善光が拾ひ上げて持ち歸り安置し奉つたものが善光寺の御本尊である。我々が小學校で日本歴史を教へられた時最初に覺えた年號が欽明天皇の御代佛敎の傳來イツチニイツチニ(一、二一)と誰しも記憶にあるだらう。

堂の壯大、賽者の雜踏は驚くばかりである。拜觀料と共に木で作つた珠數と草履を貰ひ受け、案内人の説明に依り堂宇、寶物を拜觀した。時間が切迫してゐる爲説明も大急ぎ、慣れた口調でほんのお義理に濟まし早々と引上げた。時間の嚴格なことまるで銀行か會社の様だと誰かゞ笑ふ。案内人が變つて本堂に入る。いよゝゝ所謂階段巡りにかゝる。丁度如來様の眞下に當る眞暗な本堂の床下を四本の丸柱の間の壁に沿つて一周す。途中に扉があり、その錠前に手を觸れたものは來世の幸を受けると云ふので我々も握つた。これは火災など一朝事ある場合御本尊を御移し申上げる道の爲に造つたものぢやないかと思はれる。

大伽藍の床下、足元には萬卷の御經が埋めてある。全身の神経を手先に集め、途の誤なからん事を祈りつゝ光明を求めて歩む時知らず宗教的雰圍氣の中に在るを覺えた。何かに頼らねば居られぬ弱い人間の心、來世の光明を求め滿されない不安に脅える人間の魂に安住を與へて呉れる宗教の魅力。を善男善女ならぬ私も感じつゝ廻り終つた。之を宗教的眩惑、宗教的技巧と一言に云ひ捨て得るだらうか。眩惑でも技巧でもよい。眞暗な階段を降り、不安な弱い人間の心が次第次第に緊張を加へその最高潮に達した時未來への光明を暗示された或るものを掴む、この瞬間こそ歡喜であり法悦である。この鍵こそ佛の御力にすべてを信頼し得る絶大なる暗示であり天啓である。この境涯を切實に感じ得ない私は取り残された様な淋しさを味はつた。

再び明るみに出て更めて敬虔な氣持で御本尊の前に額いた。一同緊張した面持だ。自分の顔もそうであつたらう。案内人の尻上り口調を後の方で誰か眞似る。顔を突き合はしてゐる面々は笑ふ譯にも行かず澁面を作つて可笑しさを嘯み殺してゐるのも今まで緊張した氣分を幾分柔げた様な氣がした。

尼宮様の御住ひの大本願は仁王門の西、筋堀を廻らした御堂である。毎朝御勤めの爲め大本願をおでましになり本堂までの道々左右に額いた善男善女の頭に有難い御珠數を御授けになるそらだ。

夕靄の中に立つてその光景を思ひ浮かべ暫く去る事が出来なかつた。山門を出て兩側大道を挟んで旅館と土産物を賣る店が數町並んで居る。一行はそれ／＼茶そば、干そば等の土産物を仕入れ料亭富貴樓に入る。朝から曇り初めた空は崩れて雨となる。一風呂浴びて浴衣に着換へ宴會を開く。料理と云ひ器と云ひ接待と云ひ旅に出て意外の氣分一同快くし興大いにあがる。宴酣にして或は木曾節、伊那節を習ふもの踊を教はるもの歡を盡して十時半散會、二臺の自動車に分乗し雨を衝き一路上林に向ふ。

八月三十日。床が變ると寝られない自分も疲れが少々出たし寢心地も良かつたせいか湯に温まり夢一つ見ず朝八時迄一息にくつすり寝る事が出来た。夜、雨の中を長野から須坂、湯田中を経て海拔三千尺の山の中へやつて來た。仙壽閣は長野電鐵の經營で目下増築中、落成すれば素晴らしい旅館となるだらう。昨夜の料亭富貴樓も亦同じ經營で一行中二三人は浴衣の儘此處迄來た。萬人風呂あり、温泉プールあり、玉突あり、子供の遊び場あり、女中の應待も都會の様にすれず、それかと云つて田舎者の様に氣がきかぬでもなし好い感じを與へた。上林温泉は所謂平穩八湯の一つで星川を下から湯田中、安代、澁と續いた所にある。湯田中、安代、澁は善光寺へ參詣に來た人が遊びがてら湯に來る

處で昔ながらの湯の町である。それと少し離れて新しい上林温泉は下の湯に比べていくらかインテリな香がする。湯から上つてよもやまの話に興じつゝ朝食を済まし地獄谷を見物に行く。横湯川の右すたひに山に登る。晴れ初めた空からは淡い日の光が時々薄く射す。谷の清流を挟んで蟬が鳴く。夜來の雨に緑は新鮮味を加へ何時通つても好きな谷の細道だ。萩、薄等秋の草が我等を迎へる。色々な話に道の程も忘れ地獄谷温泉に着く。こゝも平穩八湯の一つで唯一軒の旅館には湯が滾々と湧いてゐる。之を延命湯と云ふ。横湯川の河床に方二寸ぐらひの穴を自然に穿ち轟々たる瀑音を發して十數尺熱氣を吹き上げてゐる。その響はあたりの山々に反響して耳を聳するばかりである。信州の俳人一茶が山の湯（平穩八湯を一名山の湯とも云ふ）に遊び、

雲ちるやわき捨てゝある湯のけふり

と吟じたのも湯田中、安代、澁より地獄に至る横湯川の岸に湯の湧き出て居る様を一茶獨特の輕妙さで詠みのけたものだらう。

茶屋で露の砂糖漬けに澁茶を啜つたのも場所が場所だけ懐しい氣がした。

上林の湯は此處らから引いたのだそらうだ。少憩の後又もとの道を下りて廣業寺に參詣す。長壽山廣

業寺。諸君は何宗の御寺かと思はれるかも知れない。明治の名匠寺崎廣業の畫室を其の儘寺院に、畫伯遺愛の佛像を本尊として祀り尼僧が朝夕御仕へしてゐる。一行は御堂を拜見し尼僧の茶菓の接待に嬉しく感じた。上林が有名になつたのも全く廣業畫伯の御蔭と云つても宜い。この御堂から星川のしも善光寺平を一望の下に見渡す處、あたりの靜寂と和し一入である。一世の巨匠廣業が都會の塵垢を離れこの靜寂なる仙境に卓絶せる彩管を揮ふ事の出來たのも宜なる哉と暫し默禱した。この邊には栗の木が多い。大きな栗が採れるが不美味いそらうだ。蟬がしきりに鳴く。馬鹿に鼻先に聞えるので不思議に思つたら誰かの背中で鳴いてゐるのだ。蟬を捕へて背中に入れて置いたら鳴き出したと云ふ。入れた人も入れた人、鳴く蟬も蟬、香氣なものだ。

善光寺の尼宮様が時々仙壽閣へお成りになり此處らで一日を摘草に楽しませられるとか正に一幅の聖畫であり神々しい氣がした。輕い晝食をとり、一時四十分頃上林を出發、澁安代を経て湯田中に到る。バスは二間あまりの狭い道を挟んだ兩側の旅館から乗客を拾ひながら行く。浴衣がけの湯治客が格子造りの古風な旅館の二階から見下してゐる。出發する客はバスを待たして玄關で靴の紐を結んで居る。すべてが何となくのんびりした景色だ。上林を下り澁に入る右手、山の中腹に赤錆びた何かの立像の

骨組らしいものが見える。相當大きいものに違ひない。運轉手の話に依ると高さ五丈三尺もある観音様の立像で久しい間あの御姿を風雨に曝してゐるとか。どうして完成しないのかと更に尋ねた。彼は振り向きもせず片手の指で輪を作り「これが續かないからですよ」とあつさり片付けたのには二の句がつけなかつた。大體の骨組みは出來て胴の中を下から頭のあたり迄登る階段らしいものも見える。私は丁度丸の内ビル街の一角に赤茶けた醜狀を晒して居た日本劇場を思ひ浮べ誰か特志家が早く完成して呉れ、ばと何だか傷ましい様な氣がした。湯田中より電車にて信州中野、須坂を経て長野に向ふ自動車と又趣を異にし通る町々の様など眺めながら行くのもいいものだ。我々一行はあまり自動車の便が多く初めて電車に乗りゆつたりした氣持になる。

須坂は北信第一の製絲工業地だが岡谷と同様林立する工場から出る煙の勢が「絲の町」の苦しみを如實に物語つてゐる。通過する各驛々には必ず温泉とスキー場への里程が掲示されて居るのに氣が付く。私が長野電鐵の案内圖を眺めて居ると見知らぬ隣の青年が話しかけた。彼は昨日草津から白根山を越えて來たのだそうだ。どうしても上林まで來られず上林より三里離れた奥の「熊の湯」で日が暮れ、一泊後今朝志賀高原を経て上林へ來たとか。白根山頂の眺望、志賀高原の景色をまだ覺めやらぬ

感激の面持ちで口を極めて賞めて居た。八里の山路を單身黙々として歩いて來たので人懐こくなつたのだらう。山の魅力も亦偉なる哉と思つた。話をして居るうち長野に着き、三時三十八分發の列車に乗り換へる。長野を出て犀川を渡れば犀川と千曲川に挟まれたる所謂川中島である。

その昔越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄がこの地に鉾を交へること數十合、車窓右手に崖崩れの見へるのが信玄の本陣茶臼山、左手重疊たる山の最も平地に近い小高い所が謙信の本據妻女山である。左手千曲川のほとり八幡原は謙信敵の虚に乗じ單騎大刀を振り翳して信玄の本陣目がけて斬り込んだ處である。見渡す限り千草離々、古木鬱蒼として當時を偲ぶにふさわしい。無言の自然は黙々の内に人の子の評ひを冷やかに眺めて居る様だ。

輸贏を一氣に決せんと敵の懷に飛び込んだ豪膽さ或は敵に鹽を與へた純情さに我々青年は限りなき思慕と尊敬を捧げるが一方猪武者の眞向より打ち下す火の如き大刀を大事に到らずして受け止めた徹の信玄に學ぶ點が多いであらう。もし武田の軍勢に取り圍まれ多勢に無勢取り押へられたとすれば後世史家の物笑ひとなつたかも知れぬ。

勇と智、熱と略、古來稀に見る對照である。戰の規模、戰局必ずしも重大でないと云ふのではないが

かくまで川中島の一戦をして人口に膾炙せしめたものは實に對立の妙味と云ふ點にあるのであらう。アナウンサーの口吻を借れば古今東西切つての大取組國技館の鐵傘下耳を聳するばかりと云ふ處だらう。

愚にもつかぬ考へに懷古の思ひを馳せる中車は千曲川を渡り、その儘川添ひに走る。右手山の裾、人家の比較的稠密する所が戸倉、上山田温泉である。後は山を負ひ前は千曲川の清流に臨む。いかにも山の温泉らしい。車窓から左右に頸を出して汽車の前面に見える筈の淺間山を求めたけれども唯かすかに菅平のスキー場とおぼしきなだらかな傾斜が燻つて見えるばかりであつた。上田に入る少し前左手に二階建の櫓が見える。この櫓こそ徳川の大军を迎へ打つた眞田昌幸の築城にかゝる上田城の遺蹟である。信州は戰國時代より小豪獨立して鬪争を事とし豊臣徳川の時代となり小藩獨立し漸く社會秩序が定まつた。一國十藩に分割され外に天領あり領地が頗る錯雜してゐる。我々が旅行した途にも諏訪、松本、飯山、須坂、篠井、上田、小諸の諸城址があつた。かく小藩に分れたのは自然の要害に築城し、小割據に適する地形を有する爲めであらう。背後には山を負ひ前は川に臨み白雲去來する城址に立つ時詩人ならずとも歴史をめぐる榮枯衰盛に切々たる哀愁旅人の涙をそゝるには充分であらう。

上田にてバスの出發迄二十分あまりあるので驛前の本通りを歩いてみた。みずゞ飴を賣る店、信州林檎を賣る店等に入り思ひ思ひ御土産を買ふ。ある土産物を賣る店先で粗朴な木細工が目についた。農民美術と銘がうつてある。木のかげらで楊子入れ、インクスタンドが出来てゐる。細工と云ひ塗と云ひいかにもプリミチーブで土の香が豊富だ。農民が耕作の出来ない冬の餘暇を利用して作つたものだらう。何とも云へぬ親しみの中に農村更生の力強さがほのかに感ぜられる。

バスに乗り千曲川に架けた橋を渡り、暮れ行く山々を眺めながら桑園の間を行く。上田一體は桑園よく開け信州養蠶地として有名であるだけ近年の繭安には大きな打撃を蒙つてゐる。下諏訪、岡谷一體にしる中野、須坂あたり或は製絲に或は養蠶に近年不況に喘へいでゐる様子は一介の漂客なる我々の目にもしみくゝ窺ひ知られるのである。製絲工場に働く女工の需要を充し切れず女不足をつげた信州も今では娘達の嫁入仕度にも事缺くであらう。

川を渡つて行く事五分、曲り角に一軒の小屋があり檢札をうけた。バスの檢札とはおよそ初耳だ。尤もこれにも理由はある。土地の心安い人に無賃乗車をさすとか、されるところで云ふ制度を設けたのだそらうだ。田舎道で野良仕事を終へた百姓が心安いバスの運轉手に二三丁の間の事だし空いてゐ

る、お乗んなさい乗せて貰はう、誰から云ひ出した事でもいゝ、たゞその風景を思ひ浮べほゝえましくなつた。利潤を上げる營利会社の立場から見れば檢札も亦已むを得ないであらう。しかし特定の一個所で檢札するのでは幾分の効果はあるだらうが完全に防止する事は不可能だ。人を見れば泥棒と思へ風の省線電車のように隨時移動して檢札しても誤間化す世の中だのにと田舎の懐しさが見出されて嬉しい氣がする。バスで二十分ばかり行くと夕靄の中に一對の圓錐形の山が聳え、その間右手に寄つてチラ／＼灯が見えるのが別所だ。右の山が男神山左のが女神山その間を湯川が流る。路はだら／＼上りになりバスは間もなくとある庭園をくゞり止つた。此處が我々一行の一夜の宿を求める花屋ホテルだ。旅館の玄關までバスが送り届けるのには一寸くすぐつたい感が出た。

早速湯へ飛び込んだ。中庭の一方に湯殿があり、三方の縁側から廊下を通じて湯殿に行く。湯殿は相當大きい。大理石で敷きつめ豪華なものだ。今迄四晩泊つた温泉中一番立派だが少し人工的過ぎる。湯は無色透明で一寸ぶんと硫黄臭い。例の如く和氣靄々の内に夕食を済まし、四五人連で散歩に出る。花屋ホテルは別所の入口だ。眞暗な道を通ること四五丁所謂別所湯の町にかゝる。北間山觀世音に詣で雪洞のある道を小川づたいに旅館が軒を並べてゐる。かすかに聞ゆる絃歌、道を行く女の嬌聲にも

温泉町の艶めかしい香がする。旅館に歸り寝る前もう一度湯に浸る。

どんより曇つた空模様、霧雨でも降つてゐるのかも知れない。湯槽のふちへ仰向けに頭を支へて透き徹る湯の中に體を浮かすともなく漂はす。湯煙を通して聞える蛙の聲は雨を呼んでゐる様だ。雨は夜のかすめてしめやかに降つてゐるのだらう。湯は綺麗でも眞水の風呂と違つてどこかコクがあり物理的に云へば比重が大きいと云ふのだらう。白樂天の詩に温泉水滑洗凝脂と云ふ句があるがこれはどの温泉にも共通する嬉しい氣持である。

漫然と湯に浮いてゐると今迄續けて來た楽しい旅を思ひ出した。

景色は何と云つても上高地が一番だ。浅間から十四里、二時間半のドライブは少し長過ぎるかも知れないが景色の變化、壯快な溪谷と我々の目を樂しませ、飽きる事を知らなかつた。いよ／＼山を登りつめ大正池畔に出た時、燒嶽、穂高の雄姿、池の白樺に一行思はず快哉を叫んだ。雨後の山は一きわ鮮やかで百パーセントの満足を與へて呉れた事を更めて天に謝さねばならない。浅間を振出しとした温泉もそれ／＼設備の點、氣分の點から變つた特色があつた、陶然と湯に浸りながら湯を思ひ出す。

浅間……

友あり酒あり大いに飲んで大いに騒ぎ浩然の氣を養ふ。淺間小唄のいくさりも覺えて來るのも悪くはない。

狭いが凝つた湯殿の中で廣間からは宴會の賑やかさ、下の料亭からは粹な音締めが湯氣を通して流れて來るのも嬉しい氣持だ。

上高地……

うす暗いが柔らかい光を投げかけてゐるランプの下で湯垢で黒ずんだ湯槽に山の苦しかつた事樂しかつた事など語り合ふには最もふさわしい。山登りの汗にまみれた體を洗ふ時、金銀の湯殿よりこの粗末なうす汚い湯をどのくらひ感謝するだらう。

赤倉……

湯殿に行く廊下には二三十本のスキーが並んでゐる。冬を待ち詫びてゐる様だ。増築も今の中と大工の手は忙しく動く。すべてが冬の準備工作だ。

白皚々の雪を蹴り池ノ平、赤倉のスロープを滑つて冷え切つた體を石疊みの熱い湯に浸す時雪焦けの顔に潑刺たる血色が甦るだらう。

上林……

温泉プール、小供の遊び場、萬人風呂、家族を連れて善光寺へ詣り此處へ來るには最もいい。蟬がしきりに鳴く。遊び場から聞える子供の聲、コツン／＼と云ふ玉突の音を木口の新しい風呂場で聞くのも味がある。

この別所は遊ぶに宜し家族連れに宜し、しかしそれだけこれと云つて特徴はない。今迄は先へ／＼と氣ぜわしくこゝへ來て初めて湯を充分味ふ事が出來た様な氣がする。とりとめもない温泉の品定めと思ひ出の絲を繰つてゐる時あたりでザブ／＼と音がする。いつの間にか他の客が入つてゐる。ほてつた體を池の側で冷やしてゐると蛙がしきりに鳴く。今夜がいよ／＼最後だと思ふと名残惜しくもあり歸路について急に里心がついたか東京の空が戀しくなる。朴念仁の自分も蛙の聲が一入身に浸み入る様に思はれる。床に入つたが湯の流れる音、蛙の聲が耳について暫く寝つかれなかつたがいつしか夢に入る。

八月三十一日。朝食後浴衣の儘宿を出て湯の町を歩く。石の湯、大師湯、大湯あり。それを中心として旅館が軒を並べてゐる。昨夜見た風雅な雪洞に納涼と書いてあるのも時期はずれでうす汚い。素

足の島田髷が金盥を持つて湯に行く。汚れた襟足、清少納言に云はしむれば「すさまじきもの」の中へ加へるだろう。湯の町は夜に限る。



北向山観世音に御詣りをする。南面山善光寺と相對し善光寺へ參詣するだけでは片詣りだそうだ。誰が云ひ出したものか。一生一度の善光寺詣りだ、こゝ迄足を延ばして休養するのも大目に見てもいゝだらう。別所小唄に「連れて行かんせ観音様へ今年十九の厄除けに」とある通り、年越しの日の御詣りは大したものらしい。その日參詣に来る娘は皆十九と鑑定していゝだらう。

御守りも善光寺のと一對で靈驗あらたかと聞き有難く戴いた。

愛宕池の遊園地に廻る。眺望開潤と云ふ事だが曇つて一向つまらなかつた。晝食を信州蕎麥に軽く済まし旅館横づけの

バスに乗り例の檢札をうけいよ／＼上田を二時四十五分發の高原列車に乗り込む。車中淺間は終に望み得ず佐久平の小諸、追分、沓掛、輕井澤と詩に歌に憧れの高原は生憎の霧雨に妨げられ、車窓よりその片鱗だに得んものと首を伸ばしたが甲斐なく窓をしめたのも恨めしかつた。

輕井澤から碓氷のあたり連続するトンネルの間に見える素晴らしいドライブ・ウェイ延々曲折汽車と並行して唐松の間を縫つて行く。今度の失業救済事業で出來た由。汽車はいよ／＼下りになる。雨の妙義を右手に眺め高崎、大宮を過ぎ七時十七分無事上野に着く。一同思ひ出の樂しかつた旅も恙なく終へた事を感じしつゝ家路に急いだ。

(完)

昭和九年十二月十日印刷
昭和九年十二月十七日發行

〔非賣品〕

不許
複製

編者 有樂會幹事

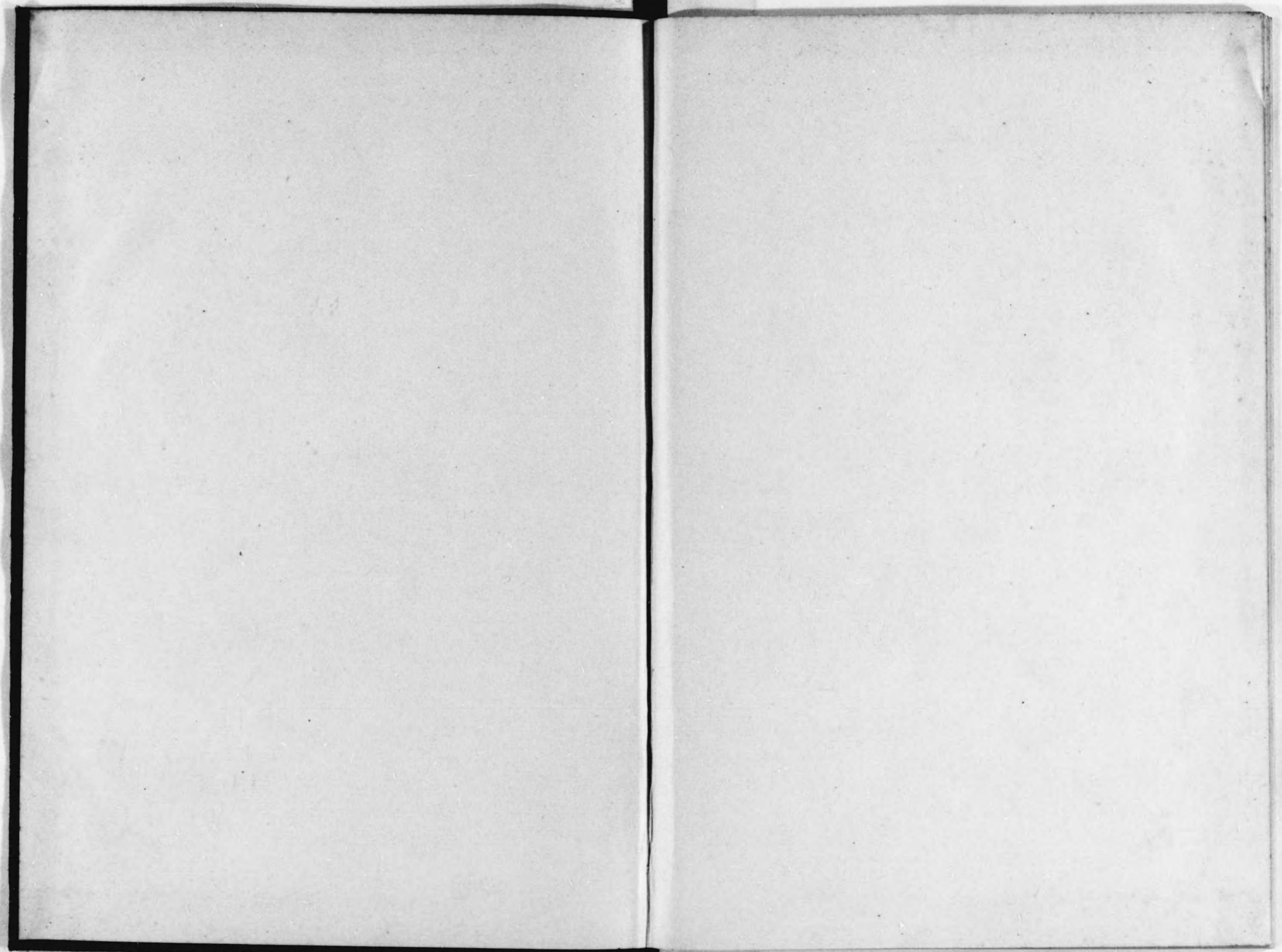
東京市世田ヶ谷區大原町一〇九七

發行者 町田 岐

東京市京橋區銀座西二丁目三番地

印刷者 高橋 郁

12.13



終

